山形県立博物館50年のあゆみ

2021

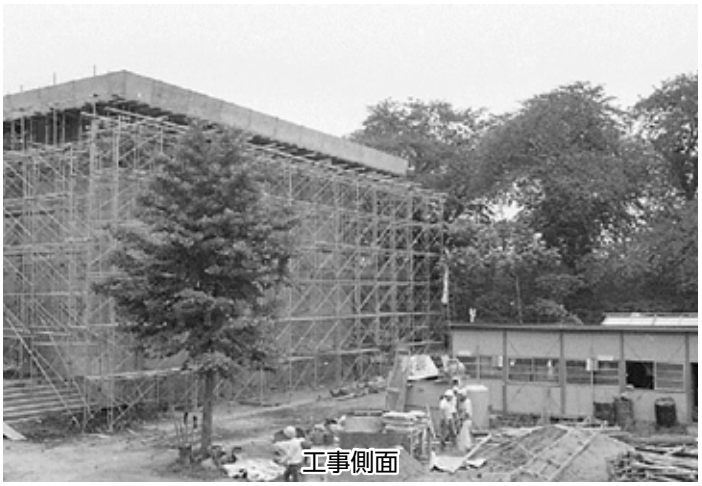
写真で見る50年

博物館全景

分館（教育資料館）

附属学習園琵琶沼

工事正面

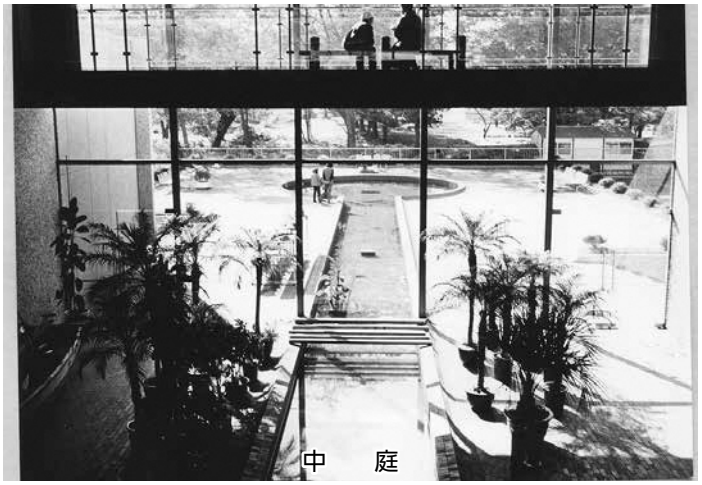


工事側面

工事背面

工事遠景

完成当時



中　庭

1階円形池

石銘板

完成当時の見学者の様子

完成当時の見学者の様子

完成当時の見学者の様子

完成当時の自然系展示

完成当時の自然系展示

完成当時の自然系展示

完成当時の自然系展示

完成当時の民俗展示

完成当時の民俗展示

完成当時の民俗展示

完成当時の民俗展示

完成当時の民俗展示

完成当時の動物展示

完成当時の動物展示

完成当時の小学生の団体見学

完成当時の動物展示

地球上の生物のあゆみ展（S47）

古文書解読講座（S47）

羽州街道展（S48）

羽州街道展（S48）

親子博物館（H3）

中庭の竪穴式住居

蔵王の樹氷原ジオラマ（H3）

「やまがたと最上川」展示解説会（H4）

第１次真室川町鯨化石発掘（H5）

化石がささやく海物語（H15）

化石がささやく海物語（H15）

やまがたの野生動物展示室（H25）

やまがたの野生動物展示室

ヤマガタダイカイギュウアルミ製モニュメント贈呈式（H25）

「縄文の女神」企画展イベントの様子（H27）

入館者５万人達成（H27）

縄文の女神「光のオブジェ」贈呈式（村山産業高校）（H27）

縄文の女神「光のオブジェ」贈呈式（村山産業高校）（H27）

東北六魂祭（H30）

化石と岩石の世界

街角の風俗

最上川のにぎわい

山形のあけぼの

山形のなりたち

山形の郷土玩具

城下町のくらし

植物の世界

農家のいろりばた

野鳥の世界

国宝展示室

国宝解説会

クロミンククジラ全身骨格展示

目　次

写真で見る50年

ごあいさつ　山形県立博物館長　生島信行 …… 11

特別寄稿　初代館長結城嘉美様御子息　結城敬美様 … 12
株式会社山下設計東北支社　支社長　杉浦光彦様 … 14
東北文教大学人間科学部人間関係学科特任教授　菊地和博様 … 16
元（第30代）山形県立博物館長　髙梨博実様 … 18
元（第31代）山形県立博物館長　奥山康夫様 … 19

寄稿　山形県立博物館専門学芸員　青木章二 …… 20
山形県立博物館行政技能員　鈴木弘二 …… 21

50年のあゆみ …… 22

トピックス …… 24

「博物館ニュース」でみる50年 …… 26

プロジェクトＹ ～博物館の50年と幸運の化石、ヤマガタダイカイギュウ～
山形県立博物館学芸員　長澤一雄 …… 37

企画展等の記録 …… 46

展示図録の記録 …… 50

研究報告の記録 …… 51

ごあいさつ

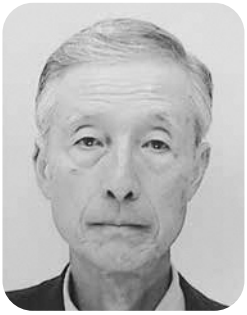
山形県立博物館長　生　島　信　行

山形県立博物館は、明治百年記念事業の一つとして、山形県の自然や歴史、文化を紹介する総合博物館として設立され、県民の皆さまの厚いご支援のおかげもあって、昨年４月をもって開館50周年を迎えました。東北地方では最も早く設立された県立博物館であり、現在は、地学･植物･動物・考古・歴史・民俗・教育の７部門を擁し、山形県の魅力を一か所で感じていただける空間となっております。

これまでの50年の歩みの中で、大きなトピックは、ヤマガタダイカイギュウ化石と土偶「縄文の女神」です。小学生２人によって発見され当館で発掘したヤマガタダイカイギュウ化石は、カイギュウ類のうち、この種では世界に一つしかない標本で、カイギュウ類の進化の解明に大きな影響を与えました。また、土偶「縄文の女神」は、日本の土偶の中で最も大きく、学術的に貴重として国宝に指定されました。パリでの展示会など海外でも公開し、縄文人が創作した土偶の造形美は、国内外において多くの人々を魅了してきました。これら世界的にも話題となった二つは、今では山形県のアイデンティティを構成する存在といっても過言ではないと思います。ほかにも多くの「山形県の宝」を収蔵・展示し、学術的な成果を示すにとどまらず、地元への愛着や誇りを感じていただける機会の提供を心がけてまいりました。当館は社会教育施設であるとともに、山形県の文化芸術の振興を担ってきたと自負しております。

しかしながら、現在、コロナ禍という全世界的な猛威によって、当館も日々苦闘を強いられております。感染拡大防止のため２度にわたり臨時休館の措置が取られ、さらに、県境を越えた資料借用が困難となったことなどにより、令和２年度プライム企画展は、翌年度に延期を余儀なくされました。現在においても、職員は交代で館内の消毒作業を何度も行い、団体への解説や講座などのイベントでは人数制限を加え｢密｣を回避するなど、緊張を持って対策に当たっております。いまだ収束の見通しが立たない不確実さと、今後への不安に満ちたコロナ禍にあって、博物館の社会的役割は何か、改めて自問自答させられました。確実に言えることは、文化芸術、自然科学は不要不急ではなかろうということです。博物館という空間で、本物を直に目にしたときの感動は、幾度も人びとの気持ちを揺さぶり、心を豊かにします。コロナ禍以前は当たり前であった、心が動かされる体験や非日常的な時間などの積み重ねは、人びとの心と生活に、潤いと充実、安定をもたらし、人びとを明日に向かわせる一つの原動力になっておりました。このような機会がコロナ禍によって多く奪われ、日常に大きな制限が加えられる現状にあるからこそ、豊かに生きていくために当館が果たすべき社会的役割はますます増していると思われます。50周年の節目に当たって、より身近な存在として、求められる使命を十分踏まえながら、決意を新たに博物館経営に当たっていく所存です。

今以上に県民の皆様に信頼され、開かれた博物館を目指し、職員一同、日々努力してまいりますので、これからも当館へのご指導、ご鞭撻を賜るようお願い申し上げます。



初代館長、父（結城嘉美）の思い出

結　城　敬　美

私は、戸籍上は四男ですが、長男、三男は夭折したため実質的には次男として育てられました。次男の10歳年上の兄は八年前他界し、今では小生が残された唯一の子息となっています。この度「県立博物館50周年記念誌」発刊に際して父（嘉美）に関する寄稿の依頼を受け、小生も既に齢82歳となり記憶もかなり薄れてはおりますが折角のご申し出故お引き受けした次第です。

父（嘉美）は1904年（明治37年）生まれ、1996年12月、92歳で他界しました。父の晩年小生が時折山形の実家を訪れ、酒を酌み交わしながら父から色々な思い出話を聞き入ったものでした。その時何時も漏らしていたのは博物館長の前職が「山形市教育長」で、当然ながら政治色の強い任務だったことで最後まで余り馴染めなかったようでしたが、その後幸いなことに「県立博物館長」を拝命、その職には心から惚れ込み、将に適職を与えられたことと喜びと感謝の気持ちで一杯であることを良く語っておりました。

「博物館長」を拝命出来たのも、父の長年に亘る植物研究が背景にあったものと思われますが、そもそも植物へ興味を生むきっかけとなったことについても語ってくれたことがありました。父は現在の村山市河島（当時は西郷村）で生を受け、幼少の頃母親が野端や畦道に咲いている草花を摘んで来ては、その花々の「けなげな美しさ」を愛（め）でながら諭してくれたこと、また高等小学校卒業後苦しい家計の中から楯岡の村山農学校に通わせて貰い、そこで巡り会った加藤元助先生(1885～1976)から植物についての懇切な訓導を受けたことだったのかなと語っていました。

農学校を卒業後小田島小学校の教師となり、そこで一念発起しての猛勉強、難関の資格を得て21歳で山形中学（現山形東高校）の博物科の教諭となり、その後は教職の傍ら暇を見つけては山野を駆け巡り昭和９年最初の「山形県植物誌」を発刊しています。因みに山中時代につけられた渾名は「ヤマアラシ」だったと聞いています。またその頃地元山形の植物の同好の士を募り「フロラ山形」を主宰しています。

小生にとっても「フロラ山形」に関わる思い出が今でも多く、といっても専ら戦後間もない頃（小生の小学校低学年時代）のことですが、「フロラ山形」の最大のイベントは毎年12月30日我が家で催される「大忘年会」、メニューは毎年同じ牛鍋で、当日の午後三々五々諸氏が集い始め、野菜の裁断や七輪炭火の準備を終え夕刻より宴会開始、数個の七輪を囲んでお酒を酌み交わす内に次第に盛り上がり、談論風発、最後は唄や踊り迄出てのお開きというのが恒例でした。ある年、小生がその有様を冬休みの宿題の絵日記にして提出、殆どの参加者が教師であったことから、その後近隣の多くの学校で話題になったとかで、翌年「参った、参った」と冗談混じりに幾人かが吐露していたことを思い出しました。

忘年会には、「フロラ山形」が象徴としていた古代中国伝承の「神農」、それの父直筆になる肖像画を床の間に飾るのが恒例でした。ある年、酔いに紛れて何方かが持ち帰ってしまい、その後も皆さんからの要望が多かったらしくてその後は抽選となり、例年忘年会の前夜には毛筆片手に

肖像画作成の準備に励んでおりました。最近になり今でもその肖像画を立派に表装の上、大事に保管しておられる方が居られることを仄聞し非常に嬉しい気持ちで一杯でした。

父の植物への傾倒振りについては、春休み、夏休みそれに休日には何処かの山野、時には飛島まで、出掛けていることが多く、帰って来ると標本作成の為の乾燥用吸い取り紙、新聞紙で何時も縁側が一杯だったこと、また撮って来た写真を自前で目張りした暗室まがいの物置で現像、焼き付けに勤しんでいたこと、また時々は上京し、専ら国立科学博物館で著名な学者先生から教えを乞うており、その後には神保町の古書店で求めた学術書の荷箱が届くのが常で、他にも常時郵便にて色々な植物学者との交流交信をしておりました。

又ある時、月山の万年雪が消滅したとのニュース（1955年９月末）を聞き、取るものも取り敢えず家を飛び出して行ったこともありました（月山万年雪下の無植物帯、その周辺のコケ類のみの地帯等の写真が残っています）。

父は殆ど毎晩夕食後そそくさと書斎に引っ込み、遅くまで調べもの或いは執筆等、怠惰な小生にはとても考えられないような生活パターンでした。

父は傘寿を過ぎた辺りから自分の来し方を振り返っての話をしてくれることがありました。勿論自分の努力もあったが、それにも増して色々交友、交流のあった方々からの多くの支えがあり今日に至ったこと、又最後の職に「県立博物館長」という望外な職に就くことが出来たこと等から全く悔いのない人生であったことを漏らしておりました。

小生は理科系ながら「化学」を専攻した為、植物への知識は殆どありませんが、それでも父が発見したと言われている「デワノハゴロモナナカマド」等幼い頃耳にした幾つかの植物の名が今でも記憶に残っています。

父の没後25年も経たにも拘わらず図らずも父の思い出を綴る機会を頂きましたが、取り止めのない内容になってしまいましたこと、何卒ご容赦頂ければと思います。

また末筆ながら今後も「県立博物館」の増々の発展を心よりお祈り致します。

神農図（結城嘉美氏作）

山形県立博物館の設計当時の思いを感じて

株式会社山下設計東北支社　支社長　杉　浦　光　彦

この度は、山形県立博物館の開館50周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。開館以来、山形県の文化振興に貢献されてきた関係者の皆様に心からの敬意を表します。

山形県立博物館は、自然科学・人文科学での資料保管と県民の文化活動に貢献される施設として、昭和46年に開設されました。設計は、当社の当時の社名である山下寿郎設計事務所にて担当させていただきました。当社創始者である山下寿郎は、山形県米沢市出身であり、この建物に対する思いは大変強いものであったと思われます。

博物館は、霞城公園という旧山形城址に計画され、自然環境や歴史的空間との調和や、既存の公共建築との連携が重視されています。施設の外観は、建物全体を２つのブロックに分け、奥側を大きく、手前を小さなボリュームとした、地上２階、地下１階の構成としています。庇の水平の拡がりと白い壁によるシンプルな形状を公園環境に馴染む自然色で構成することで、建物ボリュームを抑えながらも、博物館として重厚感のあるたたずまいを保つように計画されています。

その外装・内装の一部は、石灰岩の砕石を固めた仕上げや、内装には、天井・床材の一部に木材や、コンクリートの打ち放しが使用されています。これらの仕上げは、50年経った現在でも色褪せることなく、当時の材料の品質の高さを物語っているとともに、自然素材の活用や気候風土との調和という現在でも必要な考え方を採用していることを改めて感じることができます。

建物の内部は、展示空間を２つのブロックに分け、中央にはエントランスやホールなどの共用部と開放的な吹き抜けを配置し、共用部を南北に通した構成としています。この共用部は、展示物鑑賞時の集中環境に対して、次なる鑑賞へ気持ちを切り替える場として、また休憩スペースとして機能させています。会館当時は人々が集まる開放的な空間としても計画されていましたが、現在では展示物の増加や、湿度管理による展示物の保護のため、当時の内部の円形池や南側の大開口窓は塞がれています。また南側の外部広場も利用されておりませんが、エントランスから入って中央階段を上る途中にある階段踊り場から、南側の吹き抜けを臨むと、人が集う空間として建設当時の賑わいを感じることができます。

博物館という機能を実現するため、展示室内部は、更新性、フレキシビリティを考慮し、可動装置など展示の変化にも対応できるように計画されています。また展示空間として必要な大空間を確保する構造設計、室内環境を維持する電気設備、空調・衛生設備設計など、高機能で高い品質を確保する技術も備えられており、建設当時だけでなく、長く県民に愛される博物館として機能することが意図されています。

博物館の建設の経緯を拝見させていただき、設計から工事、竣工までが非常に短い期間で完成されていることに驚きを感じます。当時の設計は手書きによる図面作成、手計算による構造設計や電気設備計画など時間のかかるものでしたが、当時の山形県博物館建設準備室の職員の方々と一緒に計画を進めていくことで、短期間での設計を完成させることができたのではと思われます。

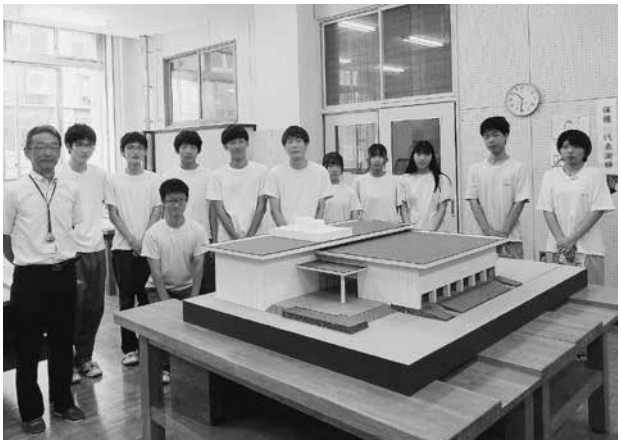
また、工事では、積雪地域での施工のため、建材の調達なども含めて建設関係者の方々の多大な協力によって実現されたものであると感じます。

山形県の高校の生徒が当時の図面をもとに製作された、博物館模型を拝見させていただきました。非常に細かく作られており、少ない図面から読み取り制作されたご苦労があったと思います。当時の手書きの図面より、CAD 化された現在の設計図では感じにくい、設計図に込められた設計者の思いを、模型の制作時に感じていただけたのではないのでしょうか。

これまで博物館に訪れた方も、今後訪れる方も、展示はもちろんのこと、建設当時の関係された皆様の思いや、空間の意味を感じでいただければ、山下設計の一員として幸いであり、山形県の文化振興に、引き続き貢献されることを願っております。

開館当時の博物館全景
白壁が古城を思わせる外観となっていました。

博物館１階には、最上川をイメージした２つの円形池をつなぐ水路がありました。



令和３年の特別展にあわせ、当時の設計図をもとに県立神室産業高等学校にて本館の模型が制作されました。

人生の転換点となった博物館勤務時代

東北文教大学人間科学部人間関係学科特任教授　菊　地　和　博

県立博物館開館50周年を迎えましたこと、誠におめでとうございます。ここに万感の思いを込めて私の博物館勤務時代を振り返ってみます。

県立博物館での私の在任期間は、昭和63年４月から平成７年４月までの７年間です。県立高等学校社会科教諭の身分のまま県教育委員会所管組織への転身であり、民俗担当の研究員（のち学芸員）としての職務を命ぜられました。高校現場とは異なり授業のチャイムも鳴らない、生徒の歓声も聞こえない、とても静かな職場での生活の始まりでした。今思うに、この７年間は私にとってまさに人生の転換点にあたるものでした。この期間に担当した様々な展示と調査活動は、その後の私にどのような影響や結果をもたらしたのか、その一端を述べます。

４月赴任早々、私は学芸課長から「10月に『子どもと玩具』という企画展の担当をしてもらいます」と告げられ、思わず「えっ」と声をあげそうになったことを記憶しています。
まず職場に慣れてから、などということは許されず、すぐさま展示準備に取りかかる必要に迫られました。この展示ではたくさんの玩具のなかの「相良（さがら）人形」という土人形との出会いが待っていました。

12月に展示も終わり、少し落ち着きを取り戻した翌年３月、『県立博物館研究報告』第10号に相良人形を比較分析した論文を発表しました。江戸時代から続いている相良家代々の巧みな手わざに、私はいたく心を動かされるようになっていたのです。でも、執筆中に土人形に向き合う日々が続いたことが、のちの研究に役立つことになろうとは思いも寄らぬことでした。つまり、後年の論文で山形県の雛人形飾りの実施率の高さが東北でダントツであることを発表したのですが、それは何故だろうかと考えたとき、庶民の安価な土人形購入が１つの要因としてあったからだと気づきました。土人形の窯場が東北で一番多かったことを調査していたことが活かされました。

さて、極めつけの展示体験を述べます。平成４年に山形県が会場となる「べにばな国体」が開催されました。じつは、それに合わせた特別展示の担当も赴任前から私に決まっていたのです。ただ、展示名も内容も私に委ねられていたため、勤務翌年の平成元年から開催前年までの３年間、タイトルとシナリオづくりに試行錯誤し、同時に展示資料の所在調査と研究に明けくれました。こうして設定したタイトルが「やまがたと最上川―上方文化との交流―」です。発刊した展示図録の編集後記に私は以下のように記しています。

> （前略）この晩稲（おくて）の私が「最上川」を担当することになったのはまったくの巡り合わせというほかない。ラッキーな試練と観念して、はて最上川にどう切り込むかを思案したとき、文化史の視座が見えてきた。近世最上川の姿を文化史的側面から考察する展示を企画することにした。（後略）

この特別展示の第１部「物資を運んだ道」では、江戸時代の最上川舟運と日本海海運（西廻り航路）の歴史･経済的役割を根幹にすえました。第２部「文化を運んだ道」では、紅花の染色文化･雛文化・祭礼文化など、今なお山形県を特徴づける文化の多面的要素を盛り込みました。さらに特別に加えたのは「第３部 青苧文化をつくった道」です。ここでは紅花と並ぶ出羽特産の青苧（あおそ）に新たな光を当てることに力を注ぎました。

この展示のための資料調査や歴史・民俗的研究で得たものが、後年私に多くのプラス面をもたらすことになろうとは、当時は思ってもみませんでした。たとえば、最上川舟運の文化史的研究は、のちに所属することになる東北芸術工科大学東北文化研究センターの機関誌『最上川文化研究』の論文執筆に役立ちました。さらに大江町と長井市の最上川を中心とした文化的景観の国選定において、調査検討委員会の一員としての任務もはたすことになりました。

また、祭礼文化は、「酒田山王祭」の研究や大学の紀要論文『江戸後期　酒田山王例祭図屏風の図像をめぐる民俗学的考察』を生み出すことにつながっています。新庄祭りについても、『山･鉾・屋台の祭り研究事典』の「新庄まつり」執筆などに活かされました。青苧については、南陽市の「古代織の伝統を守る会」、大江町の「青苧復活夢見隊」の皆さんとの出会い、フェスティバル開催やDVD制作などの実践活動を共にすることができ、今も交流が続いています。

ここで、話は博物館勤務の辞令をいただいたときに戻ります。じつは、その辞令は私に少なからぬショックを与えたのでした。このとき私は卒業生を見送った直後ということもあり、学級担任があまりにも楽しくて、また引き続き担任をしたいと強く願っていました。ゆえに、博物館行きを命ぜられたその夜、家に帰った私は妻の前でボソリと「人生狂うかも知れない」といったのです。博物館赴任から12月頃までは、民俗研究室から見える霞城公園の樹木を眺め、どうしてここに来てしまったんだろう、とひそかに嘆きながら、初めての展示対応と学芸員資格取得のための受験準備で、まさに無我夢中の日々を送りました。

たしかに私の人生は「狂い」ました。しかし、それは良き人生の方向に狂ったといえます。なぜなら、その後50歳で大学への移籍をはたして、本格的に研究者の道を歩み始めることになったからです。大学からのお誘いと高校教諭退職の決断は、県立博物館での７年間の調査研究の蓄積があったからこそだと思います。

人生は何が幸いするかまったくわからないものだと、今しみじみ思います。１年近くは悶々としていた私ですが、２年目からは博物館勤務が楽しくなり、充実した日々を送れるようになっていったのです。総務課および学芸課の方々と立場を超えて協働で取り組む職場環境にも恵まれました。このたびこの小文を記す機会をいただき、人生72年間のなかの７年間について、じつに「いとおしい日々」として振りかえることができることは、まさに幸運なことだと思っています。

最後になりましたが、県立博物館の新館建設が早期に実現できることを期待し、いよいよ山形県の文化の殿堂として博物館が中心的役割をはたされますよう心から願っております。

「縄文の女神」と共にあった日々

元（第30代）山形県立博物館長　髙　梨　博　実

「縄文の女神が正式に国宝と決まりました‼」との報告を受けたのは、私が副館長として県立博物館に赴任した2012年９月のことでした。博物館中が歓喜に沸き返ったことは、言うまでもありません。当時は日本国内も縄文ブームで、東京などで「縄文展」が開催されていました。これは、それに先立つヨーロッパにおける土偶ブームの影響が大きかったと思います。「縄文の女神」も、1998年から2009年にかけてフランス、ドイツ、イギリスで開催された「土偶展」に出品され、好評を博していました。日本の土偶についても、浮世絵と同じように、その価値にいち早く気づき高く評価したのはヨーロッパ人だったのです。

この「縄文の女神」ですが、その年の春までは、正式な名称が決まっていませんでした。４月に文化審議会の答申を受け、国宝に指定されることは間違いないだろうと言われていましたので、職員で名称についてのアイデアをいろいろと出し合ったことを覚えています。「縄文のビーナス」という候補が真っ先に出されましたが、長野県で出土した国宝指定土偶に対して既にこの名称が使用されていたため、「縄文の女神」ということで落ち着きました。今になって考えてみますと、「ビーナス」とはギリシア神話に出て来る女神の名称なので、「女神」という呼称の方が日本らしくて良いように思えます。

「縄文の女神」の国宝指定を受け、私が特に拘ったのが「本物の常設展示」でした。それまでは、セキュリティー上の問題もあり、常設展示されていたものはレプリカだったのです。レプリカを見るためにわざわざ博物館や美術館に足を運ぶ人はいません。「本物」でなくては伝わらないものがあるからです。制作者の思いというか魂というか、そういったものは「本物」からしか伝わって来ないと思います。そこで、「本物」を常設展示できる専用展示室を作ろうと、何度も県と協議を重ねました。そして、特別予算措置をしていただくことにより、翌年の４月から専用展示室における「本物の常設展示」が可能となったのです。

この年、博物館長を拝命した私の仕事は、山形県民の宝であり日本国民全体の宝でもある「縄文の女神」を、多くの人々に知ってもらうことでした。残念ながら、この素晴らしい土偶が広く知られているとは言い難かったからです。そこで、ＨＰの充実は勿論のこと、ＳＮＳでも広報することにしました。また、県埋蔵文化財センターの協力を得て正面玄関付近に「縄文の女神」の巨大模型を設置、県立産業技術短期大学校の協力で１／３サイズの３Ｄモデルを制作、そして遂に、神町電子株式会社の板垣政則社長のご助力で実物サイズの３Ｄモデルの制作に漕ぎつけることが出来ました。特に実物サイズの３Ｄモデルは、「縄文の女神」の山形県民への啓蒙活動に大きな役割を果たしてくれました。出張博物館として訪れた山形盲学校では、生徒達に直接手で触れてもらうことで、「縄文の女神」の大きさや形状について知ってもらうことが出来ました。生徒たちの輝く笑顔は、今でも忘れられません。

世界の名だたる美術館や博物館のほとんどを訪れるほど美術鑑賞が好きな私にとって、このような絶好な時期に県立博物館で「縄文の女神」との日々を過ごせましたことは、私の人生にとっても非常に大きな出来事でしたし、この上ない喜びでした。

平成26年のご視察を振り返って

元（第31代）山形県立博物館長　奥　山　康　夫

平成26年10月に皇太子徳仁親王殿下がご来館されました。６月の秋篠宮妃殿下と眞子内親王殿下のご来訪に続くもので、この年は二度も皇族方のご視察を賜るという特筆すべきものとなりました。しかも平成４年に清子内親王殿下にお越しいただいて以来、久しくなかった皇族方のご来訪ということで、全職員が緊張感を持ちながら一丸となって取り組んだことが思い出されます。

皇族方をお迎えするにあたり、課題となったのは館内施設設備の問題でした。建物自体が竣工以来すでに当時で40年以上経過しており、様々傷みがあるのが実情でしたので、電気系統など肝心な時に大きな支障が出ないだろうかと心配の種は尽きませんでした。ご案内をする順路や手順を決めてからは、随行や警備、報道陣の動きなども頭に入れながら、動線上にある展示品に不具合がないか、階段や床面に危険がないかなど点検と整備を繰り返しました。館長室をご休憩室としてお使いいただきましたが、窓の目隠しやソファの改装などには特別に予算をつけてもらいました。これらは今も使われています。現在入口ホールにある館全体の案内図や２階の県内巨木の紹介パネルも当時新設したものです。さらには誘導のための仕切りパネルなど、他の施設からお借りして不足分を補ったものもありました。施設設備関係では総務課の職員は特に骨を折ってくれたと思っています。

ご案内役は、主として館長である私が務めました。特段に力を入れたのは縄文の女神とプライム企画「未来に伝える山形の宝」でしたが、他にも山形県の文化、歴史、自然、風土などにできるだけ触れていただきたいという思いで、多くのコーナーをご覧いただくよう努めました。事前準備の段階で各展示を何度も回って、自分なりに案内の草案を作ってからは学芸課の職員に再三にわたりチェックをしてもらい、分刻みの案内マニュアルを作成しました。博物館へのご訪問ニュース映像のハイライトは、何と言っても縄文の女神の展示コーナーでしたが、これも事前に報道陣が皇太子殿下を撮影するカメラの位置を考慮し、自分の立つ場所などを予め決めておきました。縄文の女神について、殿下からは「相当の技術をもって作られたのですね。」とのお言葉があり、特に関心を持っていただいたようです。また、月山の自然資源についてご説明申し上げた際に、殿下から黒曜石に関するご質問がありましたが、私の知識ではその場で答えられず、ご休憩を取られている間に急いで担当者に確認をし、館を離れられる前に殿下に回答を差し上げることができて安堵しました。実はこれも想定内のことで、こういう場合の手順を事前に学芸課の各担当者と打ち合わせをしていたのです。

これまで述べた事柄以外にも職員には色々な役目を担ってもらいました。当時を改めて振り返ると、館として滞りなくお迎えできたのは、職員の一致協力のおかげであったと思います。殿下の本県行啓が終了した後の県部長会の折、県知事が特に博物館に言及しながら関係職員、部署の労をねぎらって下さったとお聞きしました。博物館職員が皆で力を合わせて務めたことを評価して頂いたものと思っています。

（称号、役職名はすべて当時のものです。）

教育資料館の収蔵資料を顧みる

― 保管と管理、40年の歩み ―

山形県立博物館　専門学芸員　青　木　章　二

教育資料館（分館）は、昭和55年（1980）の開館以来40年余になるが、私はその内の約半分の20年間を当館で勤務することとなった。着任して最初の仕事が、「開かずの部屋」となっていた校長室の整理と復旧であった。部屋の中は大量の資料で埋め尽くされていた。

「教育県山形」といわれる本県の教育関係資料の収集と保管をひとつの使命として開館した当館であったが、収蔵施設の未整備は当初からの大きな問題であった。開館時、既に７,200点余に及んでいた収蔵資料は増加の一途をたどっていた。館内の収蔵スペースはすべて利用し尽し、つかえる場所を求めて職員が「右往左往」せざるを得ない状況が、開館５年後に報告されている（『山形県立博物館研究報告第６号』）。

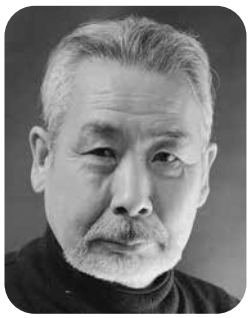
その後、時期は不明であるが、旧教育庁庁舎（旧県庁に隣接してあった建物４階）を収蔵庫として借用するようなった。この時は、教育資料館、本館一時収蔵庫、旧教育庁庁舎の３ヵ所に分散されて資料が収蔵されていた。

平成５年(1993)11月より、山形市緑町にあった「新築西通り会館」の部屋（164㎡）を収蔵庫として借用するようになった。建物の気密性不良のために収蔵庫に塵埃が入り込む、温湿度の管理が不十分なために資料にカビが発生する、という種々の問題があったが、とりあえずは、資料の保管には十分なスペースを有する施設を確保することができた。しかし、この建物は老朽化が進み、とりわけ耐震性に難があり、後に取り壊しが決まった。

「新築西通り会館」の解体に伴い、平成23年（2011）11月、収蔵庫は村山総合支庁北庁舎（村山市楯岡）に移転し、現在に至っている。この引っ越しでは、搬送用の段ボール箱は１,000個を超え、運送用トラック（４ｔ）は延べ８台に及んだ。保存環境の点ではかなり向上はしたものの、収蔵庫が遠隔地にあるのは多々不便を来たすものである。

収蔵資料は当初、帳簿等で管理され開館から昭和62年（1987）までに28,175点が記録されている。また、同年には、「山形県立博物館資料整理要項」が施行され、資料管理の一層の適切化が図られることになった。平成６年(1994)からは、資料管理にPCが導入され(管理ソフトは“The CARD”、後に“File Maker”に変更)、業務の効率化に大きく寄与することになった。21年(2009)には「地域資源のデジタル化推進事業」が開始されて資料のアーカイブ化及びデータベース化が進み、翌22年（2010)10月には、本館webサイトにデータベースの第１次公開が行われた。令和３年（2021)12月現在、教育部門の登録資料は61,424点を数え、点検・修正を経て逐次webサイト上に公開している。

当館の収蔵資料は、独自の分類によって整理され、中でも約12,000点に及ぶ「教科書コレクション」は質・量ともに全国有数のものである（『研究報告第31号』）。特に、江戸時代及び明治期に本県で発行された地方版の教科書は、当館にしか収蔵していないものが多数ある（『研究報告第39号』）。こうした貴重な教育資料を後世に大切に継承していくためにも、当館においては適切な保存環境が担保された恒久的な収蔵施設の整備が強く望まれるものである。



「珠玉の一枚」

山形県立博物館　行政技能員　鈴　木　弘　二

「特別展の写真撮影を鈴木弘二氏に担当していただく。」

館内会議で館長のあいさつで言われ緊張したことを思い出します。平成４年度特別企画展「やまがたと最上川」の図録用です。

昭和63年に職員採用される前、写真関係の仕事をしていたこともあり指示があったのでしょうか。

図録用の写真とは何か分からない中、担当学芸員の熱い想いを受け、県内外に取材に出向きました。学芸員に連れられ、見るものも行くところも初めての経験ばかりで、不安でずっと緊張していたのを覚えています。

中でも思い出深いのは、京都市へ祇園祭の取材に行った時のことです。

取材当日は大雨で、山鉾巡行の全景を撮影するのに近くのビルに急きょ駆け込み、承諾を得て５階の窓から身を乗り出しました。その際、安全確保のために私の右足を抱えて､｢よし､いいぞ｣と支えてくれたのは菊地和博学芸員、現東北文教大学人間科学部人間関係学科特任教授です。今でも会う度その話になる程です。

そうして初めて写真撮影を担当した図録が無事完成した時は本当にほっとしました。

その後、平成７年度からは業務（事務分担）の中に写真業務が加わり、令和３年度の現在まで携わらせていただきました。

これまで、図録を含め、色々な部門の撮影をこなしましたが、博物館での撮影は調査研究の一環として撮影するもので、貴重な資料、珍しい資料、壊れやすい資料、二度と撮影が出来ない資料ばかりで、神経を使います。私の力不足、経験不足、勉強不足、機材不足の中、学芸員と力を合わせながら、刊行できたことが私の宝です。

この度、原稿の依頼があり、題が「珠玉の一枚」。残念ながら一枚もありません。でも、これまでの図録の写真を見るたび、その時の状況を思い出し反省するばかりです。

平成４年度特別企画展｢やまがたと最上川｣図録から
祇園祭山鉾巡行

50年のあゆみ

昭和45．11．12	山形県立博物館建設竣工式
46．4．1	開館
46．5．27	博物館法第10条に規定する博物館として登録
51．4．1	附属自然学習園開設
53．3．29	「琵琶沼」を中心とする自然学習園一帯の県天然記念物指定
53．8．29	大海牛化石発掘調査
60．6．20	「ヤマガタダイカイギュウ化石」（レプリカ）常設展示開始
平成４．8．4	西ノ前遺跡出土土偶発掘
7．8．12	小・中・高校生の第２、第４土曜日入館無料化実施
8．8．1	展示解説ボランティア活動開始
8．9．1	博物館のウェブページ開設
9．2．22	「ミンククジラ全身骨格標本」常設展示
10．6．30	西ノ前遺跡出土土偶の国重要文化財指定
13．7．	本館１階に体験コーナー新設
20．5．31	「山形県立博物館友の会」設立
24．9．6	「縄文の女神」の国宝指定（文部科学省告示第121号）
26．3．11	国宝展示室新設（～３．29）
26．4．5	国宝土偶「縄文の女神」常設展示室オープニングセレモニー（常設展示開始）
令和２．3．28	新型コロナウィルス感染拡大防止のため臨時休館（～５．15）
3．4．1	新型コロナウィルス感染拡大防止のため臨時休館（～４．25）

博物館登録原簿

ヤマガタダイカイギュウ

■特別開館と春夏秋冬の博物館まつり

昭和56．11．3	「文化の日」特別開館開始
57．5．5	「こどもの日」特別開館開始
平成22．10．30	～31「東北文化の日」無料開館開始（10月最終土曜日・日曜日）
24．8．4	～5「ナイトミュージアム」の開催開始
31．1．14	「成人の日」特別開館開始

5月　こどもの日特別開館

11月 文化の日特別開館

8月　ナイトミュージアム

1月 成人の日特別開館

※写真は令和3年度の状況

■分館（教育資料館）のあゆみ

昭和48．６．２　旧山形師範学校本館　国重要文化財に指定

重要文化財指定書
旧山形師範学校本館　一棟
右を重要文化財に指定する
昭和四十八年六月二日
文部大臣　奥野誠亮

耐震性を高めるため、細い板を斜めに貼った廊下や天井

53．10．１　分館解体復元工事委託

55．１．26　旧山形師範学校の門衛所及び正門が重要文化財に附指定

55．10．１　分館（教育資料館）開館

平成13．11．30　「第１回世界ＴＥＲＡＫＯＹＡ会議」（京都府）（日本ユネスコ連盟主催）に教育資料館のジオラマ出展

18．２．１　江戸東京博物館（東京都）「江戸の学び－教育爆発－」展に教育資料館の寺子屋ジオラマを貸出し（～４．14）

寺子屋ジオラマ

HERITAGE OF INDUSTRIAL MODERNIZATION
認定
地域活性化に役立つ近代化産業遺産
旧山形師範学校本館
地域活性化に役立つ近代化産業遺産としてここに認定する
平成21年2月23日
経済産業大臣　二階俊博

21．２．23　旧山形師範学校本館　地域活性化に役立つ近代化産業遺産（経済産業省）に認定

22．７．17　教育資料館開館30周年記念展「三島通庸と洋風学舎－近代やまがたの学校－」の開催（本館）（～９．26）

三島通庸と洋風学舎－近代やまがたの学校－

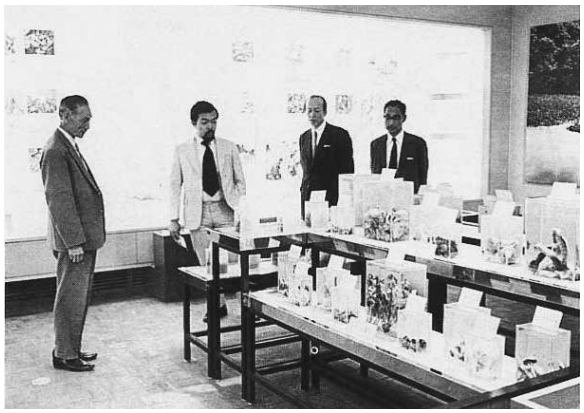
24．11．10　「やまがた教育の日」無料開館開始（11月第２土曜日）

令和２．８．　旧山形師範学校本館外壁修繕工事（美装化事業）完了

※３か年事業。平成31年２月（１年目）、令和元年10月（２年目）終了

トピックス

【皇族の来館】



昭和47．7．22　三笠宮寛仁殿下御来館

昭和47．8．1　皇太子殿下・同妃殿下御来館

• 昭和53．8．7　高松宮、同妃殿下御視察

昭和59．2．25　三笠宮憲仁殿下御来館

平成４．10．６　清子内親王御視察

平成26．６．４　秋篠宮妃殿下、眞子内親王殿下御視察

平成26．10．11　皇太子殿下御視察

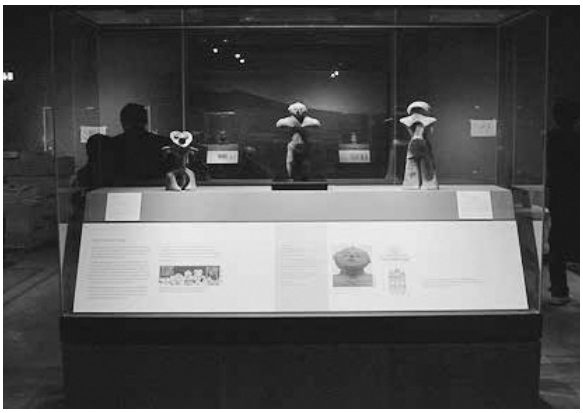
• 平成30．６．24　三笠宮彬子女王殿下御視察

【「縄文の女神」の国内外での出展】

平成４年８月に発掘された「縄文の女神」は、これまで国内外の博物館に数多く出展されています。

平成10．９．29　「JOMON（縄文）展」（文化庁主催）（パリ・日本文化会館（フランス））（～11．28）
平成13．１．20　「日本文物精華展」（文化庁、上海博物館等主催）（上海博物館（中国））（～３．20）
16．６．２　海外展「日本の考古－曙光の時代－」
文化庁・国際交流基金ほか主催（～17．６．10）
ドイツのマンハイム市：ライス・エンゲルホルン博物館
ベルリン市：マルチン・グロピウス・バウ
21．９．10　文化庁海外展「THE POWER OF DOGU」（大英博物館（イギリス））

大英博物館

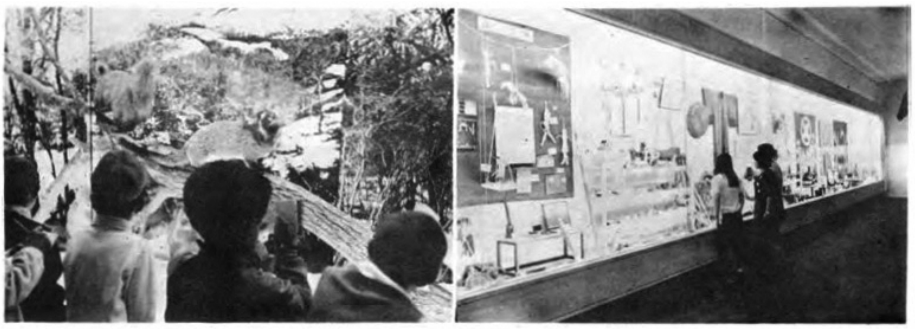

「縄文の女神」（右）

平成21．12．15　文化庁海外展　大英博物館帰国記念「国宝土偶展」（東京国立博物館（東京都））（～平成22．２．21）
26．11．21　「日本国宝展」（東京国立博物館）（～12．７）
28．３．23　特別公開（東京国立博物館）（～4．17）
29．10．３　「国宝展」（京都国立博物館）（京都府）（～10.29）
30．７．３　特別展「縄文（JOMON）～１万年の美の鼓動～」（東京国立博物館）（～９．２）
30．10．17　ジャポニスム2018「縄文　日本における美の誕生」展（パリ・日本文化会館）（～12．８）

日本文化会館

「縄文の女神」（展示準備の様子）

「博物館ニュース」でみる50年



愛される博物館に

結城嘉美

当博物館は、山形県が明治百年の記念事業として計画し、3年有余、建物の建築は勿論のこと資料の収集整理、またその展示方法などについて関係者の並々ならぬ苦心と県民各位のご協力によって、去る4月1日開館となったものである。

内容は動物・植物・地学の自然部門と、民俗・考古の人文関係の5部門に亘っており、美術と理工学部門を除いた総合博物館であって、特に自然部門に力がそそがれた点では全国でも数少ないものであろう。当博物館は、これらの5部門の展示によって、県民の多くの方々に、われわれの生活している山形県の自然のもっている特色と、われわれの祖先が生活してきた歴史の跡を知ってもらい、高い教養とゆたかな人間性に培かい、貴重な文化遺産を保存伝承し、さらには文化の創造に寄与しようとするものである。

このような目的のために、理想的な展示を行なうには絶えざる資料の収集と調査研究の仕事の裏づけがなければならず、またこれを利用しての積極的な館内外における教育的な普及活動を行なう必要がある。

開館以来2ヵ月、入館者は4万人に達した。子供達のくい入るような目のかがやき、思わず口をついてでる感嘆の声、古い品々からは心のふるさとを求め得て、安らぎと暖かさにひたる年輩者の姿などを見るにつけ、こうした文化施設がいかに喫緊のものであったか、まざまざと見せつけられた感がある。

今後一層、内容の充実と改善につとめ大方のご期待にそいたいと覚悟を新たにするものである。

（山形県立博物館長）

山形県立 博物館ニュース 1976 12・1 第29号

山形県立博物館自然学習園

環境博物館への布石

館長 佐藤信一

山形県立博物館は、開館以来3年を経過しようとしている。本年度の重要な課題は、社会の変化に対応した展示替を実施し、その基本設計をつくることと、自然学習園を設置することであった。

自然学習園は、将来の博物館のあり方を考え、植物、野鳥、昆虫などを自然環境そのもののなかで、その植生や生態の実態を観察することができるようにしようとしたものである。

自然学習園は、白鷹山系の琵琶沼を中心に、その周辺の雑木林7ヘクタールを購入して設置したものである。琵琶沼は、低層湿原、中層湿原及び高層湿原が発達し、原植生がそのまま残存しているきわめて貴重な地域である。この湿原には、サハリンや北海道に分布しているヒメカイウやホロムイソウをはじめ、ツルコケモモ、イボミズゴケ、ハイイヌツゲなど多数の湿原植物が産し、周囲の雑木林は、コナラ、ミズナラなど裏日本特有の植生が一見できる林分構成になっている。

しかも、ここには、クロスジギンヤンマ、コサエナ、ヨツボシトンボ、エゾイトトンボなどの21種のトンボ類やチョウなどの昆虫類も多数生息し、野鳥類もきわめて豊富である。

現在の博物館は、標本を中心にしたいわば建物博物館である。しかし、今後の博物館に要請されることは、動植物そのものを自然環境そのもののなかで観察できる機能をもつことであろう。

自然学習園は、山形県立博物館が環境博物館としての機能をあわせもつ新しい性格の博物館へ動き出した一つの布石である。将来さらに、史跡、遺跡なども歴史学習園として整備することも考える必要もあろうが、本年度は、財政のきわめて厳しい条件のなかで、自然学習園を設置することができたことをたいへんうれしく思う。

山形県立 博物館ニュース 1977 10・11 第40号

行事案内

催し物展

- やまがたの岩石展
  — 古生代・中生代の岩石 —
  11月12日（土）～1月8日（日）

「郷土と歴史」講座

- 信仰と山の村　11月18日（金）
- 鎮守と在家　12月16日（金）

文化の日　講演と映画のつどい　11月3日（木）

- 講演　紅花の原産をさぐる
- 映画　紅花はいま他

高校クラブ研究発表会

- 郷土クラブ　11月8日（火）
- 科学クラブ　11月22日（火）

相談コーナー　オープン

県民から親しまれてきた本館の展示が、3年計画で全面的に改装されます。新しい展示は、改めて山形の豊かな自然や郷土を見直すとともに、県民としての誇りや地域的な連帯感・所属感をも、培うことのできるテーマをもって展開されます。

それは、また、県民が厳しい自然とたたかいながら、長い歴史と伝統のなかで築きあげてきた山形県を、さらに発展させていくエネルギー源になるでしょう。

10月1日にオープンした相談コーナーは、県民や見学者の疑問や質問に親しく応える場であり、新しい展示を支える博物館活動の中枢機能として測り知れない役割を果たすものです。

資料紹介　民俗

ニセミノ　—県文化財指定—

昭和52年8月19日付で山形県文化財保護条例第26条第1項の規定により、山形県指定有形民俗文化財として、県立博物館所蔵ニセみの5点が指定されました。

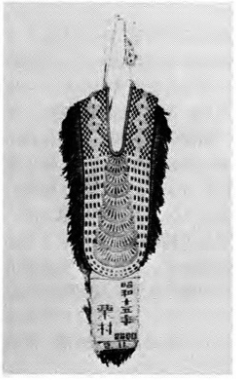
ニセみのという名称は「ニセのみの」などと誤解されやすいが、「荷物を背負うみの」つまり「ニセオイみの」→「ニショイみの」→「ニセみの」と訛ってきたものです。

県内の「みの」は各地域に応じて、自然に適応しながら、自然の生みだした原料（樹皮—方言名モアダ・オッカ皮、スゲ類、ワラ、マコモなど）を利用してつくられ、愛用されてきました。みのを機能的に分類しますと、ハレみの、雨みの、防寒みの、荷背負みの、腰みのなどとなります。

特に、荷背負みのとして、県下全般にみられるワラ製の「背中一」のほかに、庄内のバンドリ、村山地方のニセみのがあります。庄内のバンドリ型のものは、富山県や新潟県にもありますが、美しさ技巧の尽されたバンドリは庄内地方のものが最高と考えられます。バンドリという名称の要因には諸説があり確定的なものはありません。

バンドリの製作については、若衆が嫁を貰うようになると、一生添う妻のためにバンドリをつくって送る風習があります。致道博物館で所蔵されているバンドリは国の重要民俗資料となっています。

一方、村山地方のニセみのは、系統的には会津系と羽州街道（宮城県七ケ宿）を通って入って来たものが、山形で合体し、技巧の極みを尽して作られた美しいみのが生れたと考えられます。会津



地方では「半みの」と呼び腰の部分が巾広くなっています。宮城県のものは、肩に当る部分の野毛が長くなっているのが特徴です。

ニセみのは山形市の西部を中心として発達し、若衆が冬仕事として、老人からみの作りの技術を受け継ぎました。原料として、ワラミゴ（ワラの芯）を用いますが、背中に七つの宝珠模様、肩の部分は市松模様、矢絣模様、「尾っぽ」の部分には家紋、松、竹などの縁起の良い模様が編まれています。ワラの他には赤黄緑黒青などの布切、木綿糸を用いるのも村山地方の特徴といえます。ニセみのも、バンドリと同様に、若衆が嫁のためにつくり、妻が一生愛用したものです。

山形県立 博物館ニュース 1980 10・11 第58号

教育資料館のオープン

昨年の国際児童年に続いて、56年の国際障害者年と、このところ、世界的な視野に立って教育を考え、その在り方を探るキャンペーンが活発に展開されています。まさに、「教育の時代」の到来を告げるに相応しい幕あけといえます。

山形でも、本年10月1日、期せずして、旧山形師範学校本館が、装いも新たに山形県立博物館教育資料館として開館しました。

教育資料館は、時代の推移とともに変化し続けてきた「山形の教育」を、県民生活とのかかわりあいで考え、そこから新しい知恵を生みだし、さらには、知的生活をより豊かにするという役割を果たすことが期待されています。

心に残る資料館に充実・発展させたいものです。

行事案内

催し物展

- ○洋ラン展　12月4日(木)～12月7日(日)
- ○山形のおしば展　12月13日(土)～2月1日(日)

「郷土と歴史」講座

- ○山形の地名伝説　12月5日(金)

高等学校クラブ（部）研究発表会

- ○科学クラブ部門　11月30日(日)

◆ 昭和初期の教育

明治初期の教育界には、大正時代後期の「自由教育」を強く受けついで、自主性を尊重する傾向がみられ、児童中心主義の教育が行われていました。山形でも、画一的な教育がみなおされ、地域に即した教育やつづり方教育が行われました。

「小学校の授業風景」のジオラマや郷土読本、助木、体操用具や体操着などの展示から、昭和初期の山形でおこなわれた教育のようすが理解できます。

小学校の授業風景（ジオラマ）

戦時下の学校（コスチューム）

◆ 戦時下の教育

昭和12年、日華事変がおこると、山形でも、団体訓練や体力錬成の教育が重視されるようになりました。また、イナゴ取り、落穂拾いなどの奉仕作業や出征兵士の家庭への労働奉仕なども盛んに行われ、学校生活も大きくかわって来ました。

「戦ふ小国民」のVTRや「戦時下の学校」のコスチューム、教科書、背のうなどの展示から、戦時下の山形では、どのような教育が行われていたかが理解できます。

◆ 新しい教育

昭和20年8月、太平洋戦争が終ると、山形でも、9月から授業が再開され、戦後の教育がスタートしました。翌、21年8月、「教育刷新委員会」が設けられ、連合国軍の指導、監督のもとに「新しい教育」の骨組がつくられました。

六三制義務教育、新制高等学校、へき地教育、特殊教育、社会教育などのテーマによる展示から、戦後の混乱から現在にいたる新しい教育の流れが理解できます。

新しい教育

◆ 教員養成のあゆみ

わが国の教員養成は、諸外国のあり方を吸収・発展した時期をへて、師範教育という、わが国独自の教員養成の制度を確立しました。

師範学校の建築部材や校舎模型、年表などの展示から、山形の教員養成のあゆみが理解できます。

教員養成のあゆみ

2 展示内容

◆ 藩校と寺子屋

江戸時代には、山形にも、武士の子弟のための藩校・郷学や、庶民の子弟のための寺子屋・私塾など、いろいろな教育機関があり、近代教育を発展させるのに大きな役割をはたしました。

「寺子屋の手習い風景」のジオラマ、興譲館や致道館の制度、藩校や寺子屋で使われた教科書などの展示から、江戸時代の山形では、どのような教育が行われていたかを理解することができます。

寺子屋の手習い風景（ジオラマ）

小学生の登校風景（コスチューム）

◆ 学校のはじまり

わが国の近代学校は、明治5年に発布された「学制」によってあゆみはじめました。「学制」が発布されると、山形でも、学齢児童の調査を行って就学を督励し、小学校をつぎつぎと開校しました。

三中学校・朝陽学校の校舎模型や「小学生の登校風景」のコスチューム、「学区制」や「中等学校の開校」などの展示から、明治時代前半の、山形の学校のようすが理解できます。

大正時代の児童生徒（コスチューム）

◆ 明治から大正へ

明治時代後半から大正時代にかけては、明治19年に公布された「学校令」をはじめとして、いろいろな法令が公布され、太平洋戦争末まで続く学校体系ができあがりました。山形でも、初等教育や中等教育が充実・普及し、高等教育が発足しました。

「大正時代の児童生徒」のコスチュームや校舎模型、教育勅語や国定教科書などの展示から、明治後半から大正にかけての、山形の学校のようすが理解できます。

◆ 休憩室

明治時代は音楽附属室として使われ、その後、貴賓室、応接室と移り変わった玄関二階の部屋です。

教育史年表や学校記念誌などの展示から、山形の教育の流れが概観できます。

「ヤマガタダイカイギュウ化石」の整備

昭和53年、最上川で発見されたヤマガタダイカイギュウ化石は、大海牛の進化を解き明かすうえで世界的にも貴重な「失われた鎖」の発見として話題になりました。

本館では、この貴重な化石を広く公開するために、大海牛化石整備の年次計画をたてて実施してきました。最終的には、骨格レプリカを作成し、本館の目玉の展示物にすることとし、新種の大海牛化石として、学問的に記載するための研究調査を進めております。

本年度は、産状レプリカ（複製）と各部分の骨格化石を完全に掘り出す作業（クリーニング）を計画しました。産状レプリカは、化石がどのような状態で岩石の中に産出したかを忠実に表現する必要があります。本館では、この産状レプリカの製作を、西尾製作所（京都）に委託しました。

作業は、昭和57年8月に確定のため岩石から掘り出した、頭蓋骨、下顎骨、右肩甲骨、左右の尺骨・橈骨、肋などの部分を掘り出す前のレリーフ状の状態に復元することから始めました。もとの状態にもどした部分は、産状が分かるように粘土でレリーフ状に埋め込み、壊れやすい部分の骨格化石の部分はスズ箔をはりつけて、シリコンで型取りを行いました。

型取り作業は、本館の作業室で行いましたが、ＦＲＰ（樹脂）での成型は、工場製作になりました。工場で製作された成型の採色作業は、手作業で実物と比較しながら本館の作業室で行いました。

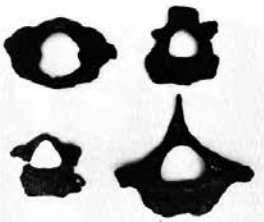
11月までにはほぼ完成し、昭和59年1月下旬には、本館の常設展示として展示しました。

産状レプリカの完成後、未だ完全に掘り出していない部分の骨格化石の再クリーニング作業を行っています。このクリーニング作業は、各部分の骨格化石の調査・研究を行い保存するためと骨格レプリカを作成するための前段の作業として行うものです。

右肋骨，1：第一肋骨　2：第二肋骨　3：第十四肋骨

右前肢，1：肩甲骨　2：上腕骨　3：尺骨・橈骨

昭和57年までに、ほぼ完全にクリーニング完了した骨格化石は、1.頭蓋骨　2.下顎骨　3.右肩甲骨　4.左上腕骨　5.左右の尺骨・橈骨　6.右手根骨・中手骨・指骨　7.肋（12本中10本）　8.胸骨の一部です。



頸椎，1：環椎　2：第二頸椎　3：第三頸椎　4：第二胸椎

昭和59年2月までに、ほぼ完全にクリーニング完了した骨格化石は、

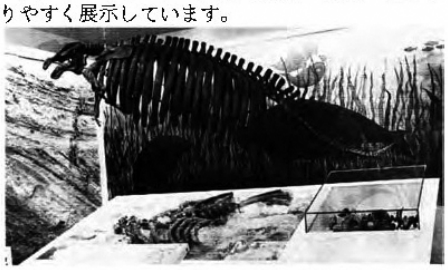
1.右肋骨：（計16本）　第1、2、3、4、5、7、9、12、13、14、15各肋骨（ほぼ完全な形）第6、8、10、11各肋骨（一部破損）　2.左肋骨：（計12本）第1、2、3、4、5、6、9、10、11、12各肋骨（一部破損）　3.左肩甲骨（肩甲切痕の一部破損）　4.頸椎：環椎、第2、3、7頸椎（ほぼ完全な形）、第4、5、6頸椎（棘突起破損）　5.胸椎：第2、3、4、5、6、7、8胸椎（ほぼ完全な形）、第1、9、10、12、13胸椎（棘突起、横突起の一部破損）　6.胸骨（ほぼ完全な形）で、今年度をもって骨格化石はすべてのクリーニングが終了し、本館に永久に保存されることになります。

ヤマガタダイカイギュウの常設展示

昭和59年度の整備事業で、ヤマガタダイカイギュウの全身骨格模型が完成しました。これを記念し、特別展「化石が語る太古のロマン」を開催し一般公開しました。

本年度は、この骨格模型と産状模型を常設展示する計画をたて、6月20日に完成しました。

第一展示室（自然部門）の入口に、産状模型を露出展示し、骨格模型は天井から吊り下げ、バックには、大海牛の復元イラスト（斎藤二良氏原画）左側面には、ヤマガタダイカイギュウが発見された地層（斜交層理が発達した砂岩）の剥ぎ取りを展示しました。海牛類の進化系統のなかでのヤマガタダイカイギュウの位置や発見の意義などわかりやすく展示しています。



山形県立 博物館ニュース 第107号
1991. 5

蔵王の樹氷原ジオラマ

聴　耳

館長　古沢　平太郎

博物館で働くようになって、探鳥会に行ったときのことを想い出しています。目の前にひろがる山脈を眺めながら、案内者は林から聞える鳥の声をとらえて、つぎつぎと鳥の名前をあげられたのです。私の耳にはどうしても聞こえない鳥の言葉を聞き分けられる超能力に感嘆せざるを得ませんでした。風や雲の動きをいち早く察知する観天望気の技術ももっておられるようで、大自然とのこまやかな交わりには深く心を動かされたのです。草木虫魚の世界に仲間入りするには、人間は余りにも退化してしまっているのかもしれませんが、この方のようにじっと聴耳を立てることを忘れてはならないように思うのです。

当博物館は、常設展のほか、「鳥海山　火・花・神」の特別展、「縄文のタイムカプセル―押出遺跡、野鳥展、おしば展、新収蔵品展」などの企画展、生態学と郷土と歴史講座などのほか、さまざまな行事を中心に今年度事業を企画しておりますが、要するに、県民の巾広い要望に「もの」で対応し、その「もの」がもっている潜在的な価値を明らかにして、「ひと」に結びつけていく機関であります。教育資料館にしても、鶴巣沼にあります附属自然学習園にしても同じことがいえます。自然や歴史、教育についての情報サービスセンターとしての役割を果すためにどうあればよいのか、絶えず吟味してかからなければならないのも当然です。そのときに、それぞれの「もの」が発する音が聞きとり易いように図っていかなければならないのです。

このたび、新常設展示として、蔵王樹氷原のジオラマを加えました。さらに、電光解説パネル等を用いて、樹氷のできるわけをお分りいただけるようにしたいと考えています。

市のおはからいで、旧山形城の「二の丸東大手門」の復元工事がヒノキの香新しく完成し、本館の入館者の数も増えております。

聴耳をそば立てて、入館なさる県民の方々の期待に応えられるよう一層努めてまいります。皆さまのご来館をお待ちしております。

◆ 蔵王の樹氷原ジオラマ完成

ジオラマ（Diorama）とは、ある情景を実物大模型と背景パネル等の構成によって、臨場感あふれる姿で再現する展示方法（実景展示）です。

このジオラマの展示計画は、平成元年の秋より始まり、様々なプランが練られ、現地調査にもとづいて進められてきました。実際の模型の製作は、東京の展示業者に委託し、山形大学の矢野勝俊助教授の監修によって、平成2年12月より始まり、平成3年3月に、本館の1階ホールに完成しました。

その製作は、次のような工程をたどりました。1)木組みと金網ネットで樹氷の外形をつくる。2)その外形にそって、ＦＲＰ樹脂によって型どりをする。3)ＦＲＰの型の表面に、硬質発泡ウレタン樹脂を厚く吹きつける。4)樹氷表面のエビのしっぽの一つ一つの細かな表面構造を、ウレタン樹脂の削り込みによって造形する。5)パイル（軟毛）塗装や雲母粉を付着させることで表面仕上げをする。6)硬質発泡ウレタンの吹きつけによって、樹氷原の雪面造形を行う。

こうして、8体の樹氷が雪面に林立する姿に再現されました。最大のものは高さ4.4mで、いずれも表面には冬季の強い西風で形成される「エビのしっぽ」を無数にまとった力強い姿をしています。

樹氷模型の製作の様子

――樹氷一口メモ――

樹氷は、東北地方の奥羽山脈の一部の山にしかできません。海外でもはっきりした報告はありません。限定された条件のもとでしかできないのです。まさに、自然が作りだした芸術品です。

山形県立 博物館ニュース 第109号
1991. 12

特別展「鳥海山　火花神」　開展式

博物館ボランティアの導入について

副館長　奥 山 武 夫

博物館活動の活性化を図るためには、専門的な知識や高度な技術をもった多様な人材の協力が必要であり、地域住民の人びとの社会参加意識を高めるためにも博物館ボランティアの導入を進める必要があるといわれています。

まだ、導入に踏切れずにいる館が多くあるなかで、各地の美術館、歴史博物館などでは長い間の蓄積と実績をもち、内容、方法、体制などでどんどん前に進んでいる館も多くなっているようです。

近年、博物館を取り巻く社会状況は大きく変化してきており、生涯学習への意欲が急速に高まっています。精神的、文化的な豊かさを求めると同時に科学技術の高度化、情報化、国際化などにより人びとはより新たな知識を習得する必要にせまられているともいえます。

博物館が生涯学習活動の一つの拠点として位置づけられ、多様な、高度なニーズに対応してゆくことは当然なことですが、博物館活動に積極的に参加し協力しながら自らの学習意欲を満足させ、生きがいを見つけようとしている人びとを受け入れることも博物館の任務になってきています。

博物館ボランティアは単に博物館職員の手不足の補てんや手伝いをしているだけではなく、ボランティア活動に参加しながら自分の学習を深め、社会に役立っているという満足感が要求されています。

ボランティア活動の導入は今後の博物館活動、活性化にはかかせない事業であるといえます。

現在、各館で行われているボランティアの活動内容は「学芸業務補助活動」、「来館者接遇活動」、印刷物発送などの「博物館付帯活動」、「環境整備」などすべての分野にわたっています。

本館では現在ボランティアの導入はなされていませんが、本格的なボランティアの導入を計るには解決しなければいけない条件はたくさんあると思われます。

受入れ体制の確立と活動場所の設定が必要ですが、可能なところから問題の解決を図り、県民に親しまれる開かれた博物館をめざしていかなければいけないでしょう。

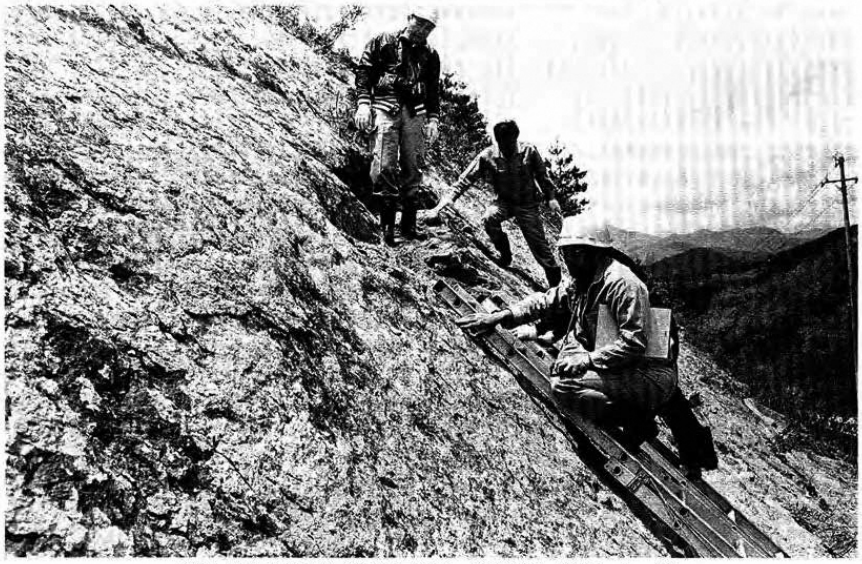
◆ 博物館20周年記念（11.2）

博物館は昭和46年に開館して以来、21年目に入りました。先日、多数の来賓、ＯＢの方々を招きまして20周年記念式を行いました。

ISSN 0918-8045

山形県立 博物館ニュース

第115号
1993. 5

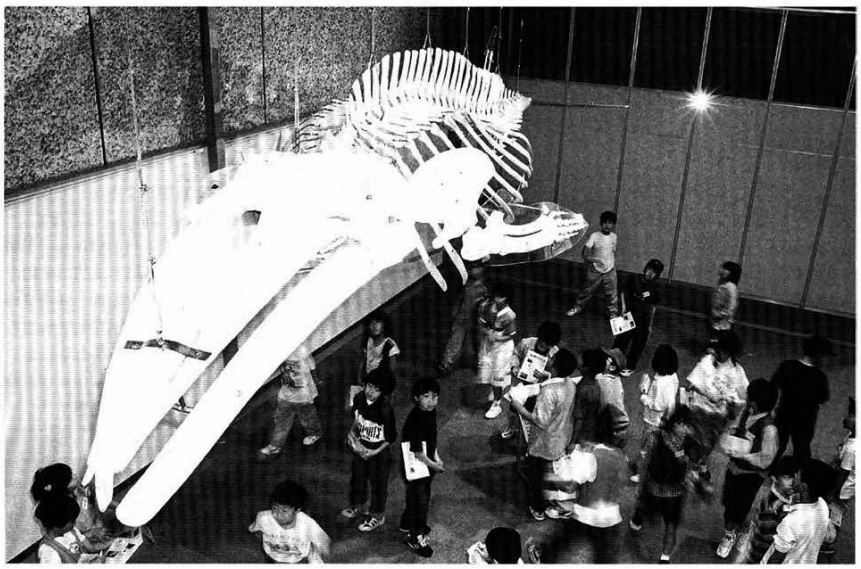


「山からでるクジラ」鯨化石調査　真室川町（1993. 5．26）

ISSN 0918-8045

山形県立 博物館ニュース

第131号
1997.5

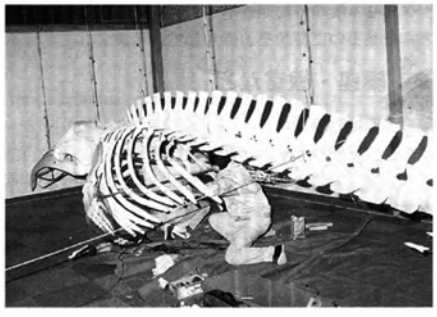


新展示「ミンククジラ全身骨格」（1997. 5）

新展示「ミンククジラ全身骨格」完成する

新しい常設展示、「ミンククジラ全身骨格」が1階ホールに完成しました。この鯨は、(財)日本鯨類研究所が行っている調査捕鯨によって、1995年に南極海で捕獲されたものです。本館での展示と研究のために、全身の骨格を寄贈していただきました。

骨格を展示するためには、鯨の骨に含まれている油分をぬく必要があります。そのため骨を砂に埋めたり、漂白処理を行ったり、またこわれた部分の補修を行いました。そして、正確な骨格に復元するために、国立科学博物館動物第一研究室長の山田格氏の指導や、(財) 日本鯨類研究所の資料の提供を受けながら、1997年2月に展示が完成しました。

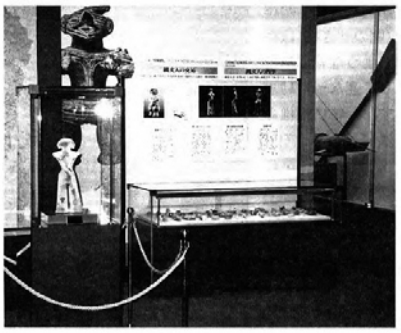


骨格の組み上げ作業（1997. 2. 4）

特別企画展

西ノ前遺跡の縄文ヴィーナス

会期：平成10年６月６日(土)～７月５日(日)



会場風景

山形県舟形町の西ノ前遺跡から出土した土偶はその造形のすばらしさから、日本中の考古ファンを魅了しました。全長45センチメートルという大きさ、曲線と直線をみごとに融合したデザイン、現代に生きる私達を圧倒して唸らせるほどの美しさの原点は縄文工芸の極致と評価されてもよいものでしょう。

この土偶は一緒に出土した残欠47点を含めて本年４月21日、国の文化財保護審議会で「重要文化財」として答申され、同年６月30日付をもって指定されました。

本特別企画展は、この重要文化財指定を記念して準備され、所謂「おひろめ」の意味で特別に企画展示されるはこびとなったものです。

本展の開催に当たっては、文化庁をはじめとして関係公所・機関よりいろいろとご協力を賜りました。この場をかりてお礼を申し上げます。

主な展示ほか事業の内容は以下のとおりでした。

１．趣　旨

西ノ前遺跡出土の国内最大級の土偶は、長野県茅野市棚畑遺跡出土の土偶とともに「縄文のヴィーナス」と呼ばれて親しまれる縄文中期土偶の双璧をなすものです。この土偶は、ばらばらに出土した部品がすべて接合して完全な姿に復元されたことから縄文時代の信仰や風俗を知る上では欠くことのできない貴重な資料とされています。また、原始美術の観点からは造形の極致とも言える作り手の技術や美意識がうかがわれ、驚嘆させるほどの様式美と完成度を備えていると評価されます。本展はこの土偶の「重要文化財」指定を記念して、本県の優れた縄文文化の一端を示そうとするものです。

２．協　力

長野県茅野市尖石考古館
(財) 山形県埋蔵文化財センター

３．会　期

平成10年６月６日（土）～７月５日（日）

４．会　場

本館（第２展示室ホール）

５．展示内容

テーマ：「西ノ前遺跡の縄文ヴィーナス」
国指定「重要文化財」関係資料48点を中心に展示解説し、国指定となった土偶の所謂「おひろめ」記念展。
■主な展示資料
西ノ前遺跡出土土偶一括（48点）
西ノ前遺跡出土土偶関係写真パネル（10点）
長野県茅野市棚畑遺跡出土土偶（国宝）レプリカ

６．記念講演会

演題：「西ノ前タイプ土偶と日本の土偶」
講師：原田昌幸氏（文化庁美術工芸課文化財調査官）
期日：平成10年６月27日（土）午後２時～
会場：山形県立博物館講堂
原田先生からは、日本における土偶研究の歴史から、土偶研究の手法、土偶の変遷、西ノ前タイプ土偶の位置づけほかの最新成果のお話しをいただき、「東北地方縄文人の文化力とそのまれな底力の存在」をあらためて感じ取ることができました。
なお、講演会参加者は約50名ほどで、講演終了後にも熱心な質疑討論のあったことを書添えておきます。

記念講演会風景（1998.6.27）

親子博物館教室開催される

～野山からのエネルギーを受けて～

今年の親子博物館教室は、大江町の朝日少年自然の家を会場として、６月６日(土)～７日(日)の１泊２日の日程で開催されました。両日とも天候に恵まれ、初夏のさわやかな風を受けて、親子がフィールドワークに汗を流しました。

今年の教室は、地学班と昆虫班の２班の構成で、参加者は地学班が52名(大人25名、子供27名)、昆虫班が74名(大人35名、子供39名)の計126名でした。今年の特徴は、２班の募集であったにもかかわらず、例年になく多くの参加者があったことと、特に昆虫班の参加者が多かったことです。参加者の多い昆虫班は、急きょさらに２班に分けて野外活動を行いました。参加者のなかには、子供会活動の一環として参加した団体もありました。自然環境や野外学習に対する、市民や子供たちの関心の高まりの反映なのでしょうか。

化石をさがす(1998.6.7)

昆虫標本づくり(1998.6.7)

初日の活動は、プラネタリウム鑑賞、地学班・昆虫班の班別学習、蛾の夜間採集見学を行いました。２日目は、地学班がおもに月布川流域での地層の観察と化石採集等を、昆虫班が自然の家周辺での森林の観察と昆虫採集等のフィールドワークを行いました。スポーツとはまた異なり、野山では大人も子供も、何かエネルギーを与えられたように生き生きと輝いてみえたのは私だけだったのでしょうか。

山形県立博物館ニュース
DEWANA
ISSN 0918-8045
No.144
2001.12.15

寺子屋ジオラマ

寺子屋ジオラマ国際会議で紹介される

教育資料館に寺子屋のジオラマが展示されている。江戸時代の教育機関としては、藩校、私塾、郷学校、寺子屋などがあり、特に寺子屋と私塾は幕末になるにつれて普及して、本県にも合わせて1,000校以上あったと推定される。寺子屋のように、庶民の手によって庶民階級の子どもたちに「読み、書き、そろばん」を教えるという基礎教育機関の普及のおかげで、明治維新以降の近代公教育制度は急速に拡充し、日本は世界の中でも有数の教育大国に発展したといっても過言ではない。

ところが、現在世界ではまだ1億1,300万人の子どもたちが学校に通えず、8億8,000万人の大人が学びの機会さえ持っていない。この現実をふまえ、すべての人が教育を受けられる社会を目指して教育の国際協力を推進しているのがユネスコ（国際連合教育科学文化機関）である。

この度、日本ユネスコ協会連盟は、ユネスコ加盟50周年を記念して、11月30日と12月1日の2日間、国立京都国際会館で「第1回世界TERAKOYA会議」を開催して、海外からの100名を含む約3,000人の関係者が参加して大きな盛り上がりを見せた。その記念すべき国際会議に、教育資料館の寺子屋のジオラマが展示されたのである。寺子屋のジオラマの展示を通じて、世界の多くの教育関係者に寺子屋の原点を知ってもらい、世界寺子屋運動の一環として世界の教育普及への一役を果たしたのである。

（菊地善教）

山形県立博物館
〒990-0826　山形市霞城町1番8号　TEL 023(645)1111　FAX 023(645)1112

ボランティア活動の紹介

当館で解説ボランティア活動が始まって今年で6年目をむかえました。その間、平成11年度に組織された「山形県立博物館ボランティア会」も軌道に乗り、日頃の解説活動はもちろん、自主的な研修や会報の発行、会員同士や職員との懇親など楽しく意欲的な活動がなされています。

平成13年度は4月に48名の登録でスタートしました。各曜日8名ずつの班に分かれて、チームワークよく日々の解説活動にあたっていただいております。特に5月や6月は小学校や中学校の団体見学が多く大忙しです。

4月、登録証交付式後の記念写真

7月にオープンした体験コーナーでは、特に昔の遊びのコーナーなど、けん玉やめんこ、お手玉など、子どもたちにお手本を示したり、一緒に楽しく遊んだりと大活躍です。

8月には会報「ひめかいう」第3号が発行されました。構成からすべてボランティア会による編集で、毎号とも内容のぎっしりつまった力作になっています。多方面で人生経験豊富な方々ばかりですので、記事の内容一つ一つがとても味わい深い内容になっています。

記事をひとつ紹介させていただくと「県博活動に初挑戦の日々」という見出しで本年度新規登録の方々のレポートが紹介されています。それぞれの題名は「解説ボランティアになった動機」菊地重富さん、「ハートフル・ウォーキング・デクショナリーを目指して」真壁敬子さん、「子供と私の魔法の館」御供妙子さん、「人と吾も供に学び楽しむ」矢作芳枝さん、「山形を知り伝えたい」渡部明美さん、「マイ・ワンダー・フィールドランド」笹原みき子さん、「父と母に連れられたフィールドミュージアムが……今」渡辺徹さん、「まだまだ見習」木村彌一郎さん、「非日常的な空間」飛塚幸二さん、「新米、自然と文化の伝承者」宇野みさ子さん、「総合博物館の奥深さを探検」京谷鎮一さん、「忙中の歓」今野健治さん、「自分の言葉で楽しい解説を」杉沼好一さん、「新人パイロットの未知との遭遇」渡辺徳子さん、となっています。ボランティアを始めるきっかけや来館者との触れ合いの様子など生き生きとした文章が綴られています。

9月には県外博物館の視察研修を実施しました。今回は自然系の展示や、また体験コーナーがオープンしたこともあり参加体験型展示の先進館を見学する目的で行いました。お隣の宮城県仙台市の東北大学理学部自然史標本館と仙台市科学館を視察し、自然系の特に岩石や化石等の地学に関する内容や参加体験型の様々な展示の様子を見学し、研修を深めました。

これからも、それぞれの方々の持ち味を十分に発揮していただいて、博物館の持つ魅力や面白さを来館者に伝えていただきたく思っています。平成14年度にむけては、本年度登録の方々の継続希望をお聞きした上で、平成14年1月から2月にかけて新規募集する予定になっています。（神保　功）

9月、東北大学理学部自然史標本館での研修

楽しく学べる「体験コーナー」

いろいろな資料にさわってみたり、昔の遊びを体験したりしながら、博物館に親しんでもらうために、7月から1階展示ホールに「体験コーナー」をスタートしました。主に小中学生を対象として、さらに大人の方も楽しめる内容を設けています。

自然系では「岩石・化石をさわってみよう」「生きた魚を観察してみよう」「おしばのしおりを作ってみよう」、歴史系では「縄文土器の文様をつけてみよう」「昔の遊びをしてみよう」「これなあに（昔の道具）」の各コーナーで、いろいろな標本や道具にさわったり遊んだりすることができます。さらに、マムロガワクジラ化石や大型のミンククジラ骨格標本も展示しており、また、山形の自然や文化に関するビデオを見ることもできます。

昔の遊びを体験

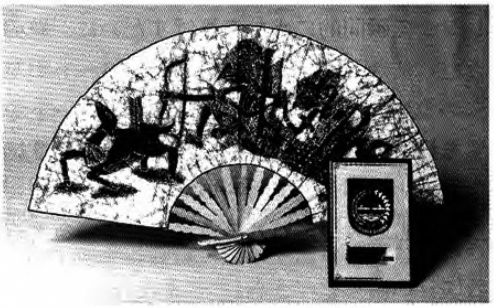
体験コーナーが始まって以来、小中学生や家族連れに大変好評で、楽しく学ぶ姿で連日にぎわっています。博物館での体験を通して、新しい発見をしてみませんか。

インドネシア教員一行が教育資料館に来館

７月14日、インドネシア小学校教員の一行22名が、教育資料館に来館しました。国際協力事業団が主管となり実施した「青年招へい事業」により来日したグループです。この事業は、日本とアセアン諸国との友好協力関係を強固・発展させることを目的としたものです。今回は、NPO法人山形県青年海外協力協会が受け入れ団体となり、山形県における教育事情の視察研修を行いました。

この研修は、7月13日から20日まで、8日間の日程で実施されました。プログラムの最初として、「山形県の教育の歴史」を学ぶために、教育資料館を見学することになったものです。一行22人のうち男性は８名、女性は14名。全員が小学校の教員で、平均年齢30.9歳というインドネシアの教育の未来を担う青年教師たちです。

約１時間半にわたる研修でしたが、どの展示室でも熱心に資料を見学し、解説に耳を傾ける姿が印象的でした。江戸時代の教育では、日本の各地に多くの寺子屋があったことや、そのために庶民の識字率がたいへん高かったことに驚きを感じたようでした。また、明治期の教育では就学率向上対策に関心を示し、女の子たちが子守をしながら学習した「子守学級」のことなどには特に興味を持ったようでした。インドネシアはたくさんの島々からなり、小規模な学校が数多くあるということで、「複式学級」の指導法やその成果についても質問が集中しました。短時間の来館でしたが、両国における教育事情の理解と交流をいっそう深めることができたと思います。　（青木　章二）



一行から贈られた記念品

「友の会」誕生！

友の会設立総会

去る５月31日、山形県立博物館友の会設立総会が開催された。「友の会準備会」そして「友の会よびかけ人会議」での10回を越える会議検討を経てこれまで係ってきた人の思いが実を結ぶこととなった。博物館事業の支援、地域文化発展への貢献、会員相互の交流を目的とし発足、現在個人会員67名、家族会員４家族、さらに会員拡大をすすめている。

これまで友の会主催の講演会を２回、要望の声が大きかった世界遺産育成企画展「最上川と人びとのくらし」や特別展「庄内の自然」の図録出版、「友の会会報」第４号までの発行をおこなうほか、博物館ボランティアとの協力のもと博物館玄関前に鉢植を設置するなどの活動をおこなっている。また、訪問した福島県立博物館は博物館友の会先進館でもあることから、設立経緯、活動、組織などについて研修、会員への報告をした。

平成21年度事業として、新たに友の会会員の宝物を展示する企画展「私の宝物」展、朝日新聞に10年間にわたって連載された『学芸員の宝物』の編集発行などを検討している。

役員は次のように決定した。

会　長　石島膺男
副会長　奥山　武
幹　事　市村幸夫・佐藤庄一・高橋一夫
　　渡辺　徹・野口一雄

博物館ニュース　第157号（2010）

企画展案内　「縄文のキセキ－半世紀の時を越えて－」　2010 年 10/9(土)～12/5(日)

西ノ前遺跡出土土偶（縄文ヴィーナス）

昨年度より、国の考古資料活用促進事業の一環として奈良国立博物館の協力で準備を進めてきました。この度、奈良国立博物館収蔵の、本県遊佐町杉沢遺跡から出土した土偶が50数年ぶりに里帰りできることになりました。また、合わせて縄文時代後・晩期の県内資料を一堂に展示するとともに、県内に完形の遮光器土偶がないことから、岩手県立博物館のご厚意で、豊岡遺跡の土偶を展示します。なお、昨年度、大英博物館で行われた「土偶展」に出品された本館収蔵の西ノ前遺跡の土偶も展示する予定です。

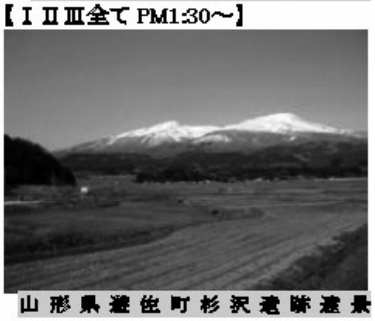
開催にあたり、借用などにかかわり奈良国立博物館や岩手県立博物館など、御協力をいただいた関係各位、御指導賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。

Ⅰ記念講演会①10/16『東北地方の縄文時代-後晩期の土偶-』;財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター金子昭彦氏②11/6 The Development and Diversity of "DOGU"土偶の発生と成長、そして"かたち"の変化;文化庁 美術学芸課 原田昌幸氏

Ⅱ展示解説会①10/9②10/31③11/27

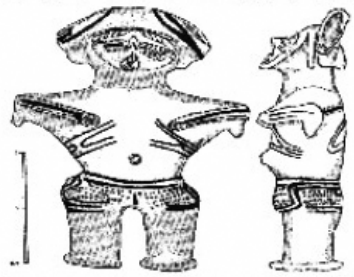
Ⅲ12/4 学芸員講座(押切学芸員)　山形の縄文後晩期の土偶

【ⅠⅡⅢ全て PM1:30～】



山形県遊佐町杉沢遺跡遠景

【展示資料紹介■考古■釜淵土偶】



＊会田容弘 1979「東北地方における縄文時代終末期以降の土偶の変遷と分布」『山形考古』３巻２号より

真室川町の釜淵Ｃ遺跡は、JR 釜淵駅から南に800ｍに位置し、真室川左岸に広がる水田地帯にあります。この土偶の発見されたようすが『真室川町史』(昭和 40 年)に詳しい。大正4年の春、地元の農家の方が自身の水田を耕していた折、鍬の先に何物かぶつかり、注意して掘り起こしてみると人形のようなものがでてきました。地蔵様と思い、仏壇に祀っていたところ、ちょうど他の家の法事に来ていた当時の正源寺住職が交渉の末、その「地蔵様」をもらいうけたと書かれています。その地蔵様の正体は土偶だったわけですが、縄文時代晩期末の完形土偶で多くの考古学雑誌や美術誌を賑わすことになりました。今回は複製品を展示します。

今回の展示に関わり正源寺の皆さまには大変お世話になりました。

博物館ニュース　第161号（2012）

展示報告：　企画展「豊穣と祈り　ー縄文女神たちの宴と古墳時代人の想いー」

開催期間：平成 24 年 6 月 30 日（土）～　9 月 17 日（月・祝）

本県を代表する土偶、舟形町西ノ前遺跡出土土偶（以下、縄文の女神）が国宝指定を受けました。本展示会は、この国宝指定を記念して行ったものです。

縄文の女神をはじめ、長野県茅野市棚畑遺跡出土の縄文のビーナスの他、代表的な土偶を取り上げ、列島の縄文時代前半期を中心に土偶文化の一端を探りました。地域展として、山形盆地の古墳時代中後期の古墳の副葬品や、集落から出土した資料も展示しました。

また、國學院大学教授・小林達雄氏の記念講演会「縄文人の祈りと土偶」が開催され、１０４名もの参加を得ました。火起こしなどの体験イベントも、天童市西沼田遺跡公園で行われました。

企画展初日の展示会場の様子

博物館ニュース　第166号（2015）

プライム企画展「未来に伝える山形の宝」

平成 26 年 6 月 7 日（土）～ 平成 26 年 9 月 15 日（月）

山形県には豊かな気候・風土のなかで育まれ、伝えられてきた、数多くの山形の宝があります。デスティネーションキャンペーン期間に合わせ、山形の精神（こころ）を今に伝える山形の宝を、第１部「考古（縄文の精神（こころ）－自然との共生－）」、第２部「歴史（山形を訪ねる－流通と往来－）」、第３部「民俗（庶民の楽しみ－三山詣りと霊場－）」で紹介しました。実施内容としては、展示解説会４回、日本を代表する考古学（Ｗ・シュタインハウス氏）・歴史学（五味文彦氏）・民俗学（鈴木正崇氏）の先生をお迎えしての３回の記念講演会、さらに関連行事として「縄文土器を作ろう」「大昔の石器を作ろう」体験教室を、東北芸術工科大学歴史遺産学科の協力を得て実施しました。また県内の資料をより理解していただくために３回の展示替えを行いました。期間中（91 日）の来館者は 15,390 人（１日 169 人）であり、好評をいただきました。展示を通して山形の魅力を再発見し、郷土への誇りと愛着を確かめる機会としていただくことができました。

記念式典の様子

展示解説会の様子

博物館ニュース　第168号（2016）

祝！　東京国立博物館の特別公開「国宝土偶　縄文の女神」に国宝「縄文の女神」と国宝附（つけたり）「土偶残欠」の計 42 点を出品します

開催期間：平成 28 年 3 月 23 日（水）～ 平成 28 年 4 月 17 日（日）

会場：東京国立博物館本館１階　特別４室

山形県が有機 EL を使用した展示ケースを作製し、東京国立博物館に贈呈されるにあたり、3 月 23 日（水）より 4 月 17 日（日）まで特別公開「国宝土偶　縄文の女神」が行われます。

この展示会には、国宝土偶である「縄文の女神」の他に、同じく本県西ノ前遺跡から出土した国宝附（つけたり）「土偶残欠」も出品されます。土偶残欠の他県での公開は国宝指定後初めてになりますので、貴重な展示会になります。この機会にぜひ、次世代展示ケースと国宝土偶の共演をお楽しみ下さい。

※国宝土偶「縄文の女神」不在中は、レプリカでの展示なっております（3 月 17 日～4 月 19 日）。不在期間をご確認の上お越しください。

国宝土偶「縄文の女神」

国宝附「土偶残欠」

博物館の50年と幸運の化石、ヤマガタダイカイギュウ

山形県立博物館　学芸員　長　澤　一　雄

はじめに

ヤマガタダイカイギュウは山形県のヒーローであり、現在でも本館を訪れた小学校の見学作文にはその名前が溢れかえっている。それは900万年前の山形の海に生きていた海棲哺乳類の化石である。一つの化石が40年を超えてここまで長く愛され続ける例を筆者は知らない。山形県立博物館が1971年に開館し、７年後の1978年にヤマガタダイカイギュウ化石（*Dusisiren dewana*）が発見された。開館から7年遅れてこの世に現れた化石は、その後本館の象徴として43年間共に歩んできた。おそらくこれからも、本館の重要展示として歩んでいくことになるだろう。

ヤマガタダイカイギュウの発掘をめぐる人々の協力、その後の予算計画、調査研究、特別展、レプリカ製作から常設展示、そして新種論文の発表などの多くの仕事は、当時の学芸員 高橋静夫先生を中心として行われた。いずれも質の異なる困難を伴う仕事であり、それらがわずか８年で行われたことは驚愕に値し、改めて高橋静夫先生に敬意を表するものである。

本館の報告書等でも述べられているように、それらにはいくつもの幸運があり、また多くの人々の協力が無くては成しえなかった。しかしながら、何よりも一人の若き学芸員が未知の化石に対して、燃えるような情熱をもって向き合わなければ、これから示すいくつもの幸運を呼ぶことはなかったし、大地から巨大な化石が姿を現すこともなかったであろう。そして、人々の心を揺さぶって力を結集し、古生物学に新たな価値を付与することもなかったであろう。

ヤマガタダイカイギュウの発見から展示までの物語には、自然資料と博物館活動に関していくつもの教訓を含んでいると考えられる。すなわち、学芸員が“そのとき”どう行動したか、どういう働きかけをしたか、それらがどのような博物館活動に発展したか、である。開館50周年の節目に当たり、本稿によって当時の状況を振り返り、今後の本館の博物館活動の糧としたい。

なお、本文の登場者の敬称は省略し、所属等も当時のものとする。また、年号は西暦で統一する。

図１　大江町用・最上川河床の化石発掘現場
（1978年８月30日）

発見から発掘

ここに1986年に本館から発行された普及解説書「ヤマガタダイカイギュウ」がある。執筆したのは主任学芸員 高橋静夫で、発掘当時の様子や研究経過などが生き生きと描かれており、発掘時の人々の動きや、新種が明らかになった頃の興奮が今読んでも伝わってくる。科学の探究の困難さと、それをはるかに凌ぐ科学の喜びが率直に伝わる名著である。本稿はそうした記録を基にして発掘当時を振り返る。

1978年８月上旬　左沢小学校６年生の渡辺政紀と齋藤正弘は、大江町字用の用橋付近の最上川の河床で化石を探しているときに、偶然大型の動物化石を発見した。そこは最上川右岸で、用橋から上流約100ｍのあたりだった。その年は例年にない渇水状態で、通常水没している河床の岩盤（本郷層橋上砂岩部層）が右岸を中心として広く露出し、彼らを待っていたかのように太い肋骨が現れていた。用橋はその前年（1977年）に完成したものであり、もしも橋がなかったならば（幸運１）、またその夏に川底の岩盤が現れなかったなら（幸運２）、そして二

図２　化石周囲の溝堀り作業（1978年８月30日）

人が河床に降り立たなかったなら（幸運３）、化石が発見されることはなかったであろう。渡辺政紀はその情報を左沢小学校の奥山守教諭に伝えた。また、政紀の兄で左沢高校朝日分校の生徒の渡辺紀雄は同校の吉見愼太郎教諭に伝えた。その情報が高橋に伝えられたのは吉見のルートからであった。

図３　化石のブロックを土ぞりに載せる
（1978年８月30日）

８月26日（土）～27日(日)　26日は左沢高校朝日分校の始業式の日で、吉見は兄紀雄の案内で放課後に現地に行った。吉見の述懐によれば、化石発見の知らせを受けたときには「どうせ大したものではない」と高を括っていたが、現場を見て「いままで見たことがない、ゾウの肋骨にも見える骨」に驚愕したという。そして、博物館の高橋にそのことを知らせようと化石の欠片を持ち帰った。

高橋はその年の３月まで左沢高校朝日分校に勤務しており、異動によって４月から博物館に着任したばかりだった。吉見は迷わずに同僚だった高橋へ事の重要性を知らせようとした。翌日の８月27日、吉見に依頼された同校の松田匡弘教諭によって、化石の発見情報とサンプルが高橋に届けられた。高橋はすぐに吉見に電話で状況を確認した。そして未知の化石が重要であることを察知し、現地調査のための行動を開始した。

もし吉見がその日に現場を確認しなかったなら（幸運４）、もし吉見が化石の重要性を直感しなかったなら（幸運５）、そして高橋もまた化石の重要性を察知しなかったなら（幸運６）、化石はその川底に沈んでいただろう。高橋と吉見が同僚だったことも情報が迅速に伝わる事に幸いした。もし高橋への連絡が遅れていたら（幸運７）、８月中に化石の発掘はできなかったであろう。

８月28日(月)　吉見によれば、その日の朝に高橋から「今から行くから案内してほしい」と電話がきたという。そして高橋は学校に着くや否や、お茶も飲まずに「すぐに案内してくれ」と言ってすぐに吉見と現場に向かった。高橋は現場の岩盤の２m四方の範囲に、肋骨が十数本と数個の脊椎骨を確認し、写真と化石の産状のスケッチをとった。化石について高橋は「見たこともない大きな動物の骨で驚いた」と述懐している。そして、海に棲む大型の生物＝クジラ、と直感したという。当時の国内では、海牛化石は長野県で見つかった１本の肋骨のみであり、日本の古生物研究者で海牛化石を知る人はほぼ皆無であった。高橋の最初の感想は当然であった。

図４　化石を曳く準備ができた（1978年８月30日）

高橋は現場を確認後、“大型クジラ”化石を発掘するための行動を開始する。まず、帰館後に状況を報告し、化石の重要性を訴えて緊急に発掘したい考えを伝えた。そして館長を中心として博物館による緊急発掘の必要性に関する意見がまとめられた。もし高橋がクジラ化石だからと発掘を断念していたなら（幸運８）、もし博物館内で発掘の体制が迅速にできなかったなら（幸運９）、またもし準備が遅れて９月に発掘がずれ込んでいたならば（幸運10）、やはり化石は川底に沈んでいただろう。

一口に“発掘”というが、実施するためには様々な準備と法的な所定の手続及び予算が必要である。当時の記録を見ると、発掘の段取りの全てをわずか

２日間で行っており驚くほかない。高橋は発掘手続を行うための説明書と関連書類（文書、図面）を短時間に完成させた。もし書類の作成が遅れたならば（幸運11）、８月中の発掘は困難だったろう。

８月29日（火）　発掘の承諾と予算を得るために、博物館所管の教育庁文化課と協議した。緊急発掘の予算の目途が立ったことから、実際の発掘計画が動き出した。高橋は午前中に吉野智雄業務課長とともに、建設省山形工事事務所を訪れて「河川敷の一時使用」の許可申請を東北地方建設局長に行った。書類は申請書と添付図面３葉である。並行して午前中に金山耕三学芸員は、地元への発掘の説明のために大江町教育委員会を訪れた。また金山は午前のうちに発掘作業を白田石材と大泉組に依頼した。

その日の午後には、なんと高橋、吉野、金山は、県自然保護課田宮良一主査と県教育センター鈴木雅宏指導主事を交えて、最上川の現場で業者と発掘方法や日程の打合せを行っている。その当時の博物館全体が、一つの仕事に怒涛のように動いている様子に圧倒される。それは博物館の誰もが経験したことがない仕事であり、川底の大きな骨格化石を何トンもの岩石ごと掘り出そうという大仕事を前にして、皆の心が高揚感に震えていたように見える。発掘計画と準備は奇跡的に短時間のうちに整っていった。

振り返れば、化石がいくら重要でも、学芸員がいくら発掘を望んだとしても、もし教育庁文化課の理解が得られなかったなら（幸運12）、もし建設省の許可が難航したなら（幸運13）、また発掘業者が迅速に決まらずに重機の調達できなかったなら（幸運14）、化石は翌30日に発掘できなかったであろう。重要な準備の一日はあっという間に過ぎた。

図５　重い土ぞりを皆で曳く（1978年８月30日）

８月30日（水）　発掘の当日は、夏の終りを告げるように雷雨の予報が出ていたという。作業は博物館職員４名、業者作業員６名で開始された。発掘は骨格を母岩に付けたまま掘り出す計画であった。作業の概要は、化石の埋没が予想される1.8m×1.5mの範囲を掘り出すために、まず周囲に幅１m深さ50cmの溝を削岩機で掘り、その後溝からクサビを打って化石のブロックを分離するというものであった。

まず周囲の溝掘りが始まった。岩盤の表層は風化によって掘りやすかったが、内部の岩は硬く作業は難航したという。昼頃に現場は40分間ほど強い雷雨に襲われる。雨によって掘りこんだ溝が水浸しになった。午後の作業は排水作業とともに始まり、作業の途中に肩甲骨らしい骨が露出した。掘削作業は慎重に進められた。

図６　化石のクリーニング作業（1978年12月～２月）
左：高橋学芸員　右：板垣誠一業務員

夕方の５時頃に周囲の溝掘りが完成した。岩盤から化石のブロックを分離するクサビ打ちの作業が始まった。作業は注意深く進められたが、ブロックはやはり重く、重量のため大小４つに割れてしまった。しかし、計画したブロックをほぼ分離することができた。そこからがまた大仕事だった。割れた大ブロック（約１トン）を100m移動させて、河岸のユニック車で引き上げなければならない。業者はブロックの移動のために土ぞりを用意した。発掘時の写真を見ると、化石を積んだ土ぞりのロープを15名の男達が必死に曳いている様子が写っている。これらの人々は本館職員、業者の作業員だけでなく、地元住民や左沢高校朝日分校の教員などだったという。

夕闇迫る６時過ぎに大ブロックの引き上げが終った。そして、残りのブロックと発掘機材の移動中に、再び強い雷雨が現地を襲った。最上川の水位が上昇する中で作業が続けられた。そして、午後７時頃に全ての化石ブロックの回収に成功した。最上川の現場は、発掘終了を待っていたかのように水没した。発掘現場は現在でも年中水没したままで、その姿を現すことほとんどはない。

実は1990年代に幸運な渇水期があって、現場周辺

が露出したことがあった。筆者は乾いた河床の岩盤の上を隈なく歩き回って化石を探した。しかし、足元の地層の模様を眺めるだけで、１個の化石の欠片も見つけることができなかった。もしあの日の雷雨がもっと激しかったなら（幸運15)、もし土ぞりの強度が足りなくブロックの重量で壊れていたなら（幸運16)、もし土ぞりを引く人手が足りなく化石を移動できなかったなら（幸運17)、やはりヤマガタダイカイギュウが太陽の光を浴びる機会は永遠に失われただろう。

化石のクリーニングから調査研究

自然資料は野外から取り出されて、調査研究によって評価され、収蔵または展示される。いわば原料を掘り出しそれを製品にするように、博物館資料となるまでに多くエネルギーが必要である。そこで流された学芸員の汗と涙に比例するように、自然資料は輝きを増すのである。そのような典型的なプロセスをヤマガタダイカイギュウの物語では見て取れる。発掘後のクリーニング作業、調査研究、そして特別展までを概観しよう。

図７　ヤマガタダイガイギュウの骨格の配列

1978年～1979年　1978年秋、化石の大きなブロックは、しばらく荷受け室で乾燥された。処理作業の方法について検討された後、12月頃よりクリーニング作業が始まった。本館には大型の化石を処理する施設などはなく、寒くて暗い荷受け室が主な作業場となった。当初の作業は、翌年の５月開催の特別展での公開を目標として、主に高橋が一人でクリーニング作業を行っていた。大型の化石を扱った経験などないため、他館の助言や文献などをもとに、暗闇の中で手探りをするような作業が続いた。後に学生等の作業補助体制が整うが、それまでは高橋の孤軍奮闘が続いた。もし翌年に特別展がなかったなら（幸運18)、クリーニング作業はもっと遅れ、重要な臼歯化石の発見は遅れていただろう。

1979年２月２日、高橋は黒色の光る小さな臼歯を取り出す。「これはクジラではない」と直感したという。その歯は歯鯨類の円錐状の歯と異なり、磨耗した咬合面をもつ明らかに草食性動物の臼歯であった。高橋は草食性の海棲哺乳類を手掛かりに調査を進め、化石は海牛の可能性が高いと確信した。現生の海牛は熱帯に棲むジュゴンやマナティーだが、当時の国内の海牛化石の産出記録はほとんどなかったのである。

図８　ヤマガタダイガイギュウ頭骨（右側面）

高橋は３月下旬に山形大学・斎藤常正教授を訪ねて、奇妙な臼歯を示してこれまでの経過を伝えた。斎藤の専門は有孔虫化石であったが、山形大学に赴任する前の勤務先がニューヨークのアメリカ自然史博物館で、海外の研究者の知己が多かった。斎藤は高橋から写真と臼歯１本を預かって、アメリカ自然史博物館のテッドフォード（古脊椎動物学）に送って化石についての同定を依頼した。間もなくテッドフォードから回答があり、北太平洋の海牛類の新発見に間違いないとのコメントがあった。そして、より詳しい海牛化石の専門家のハワード大学・ドムニン

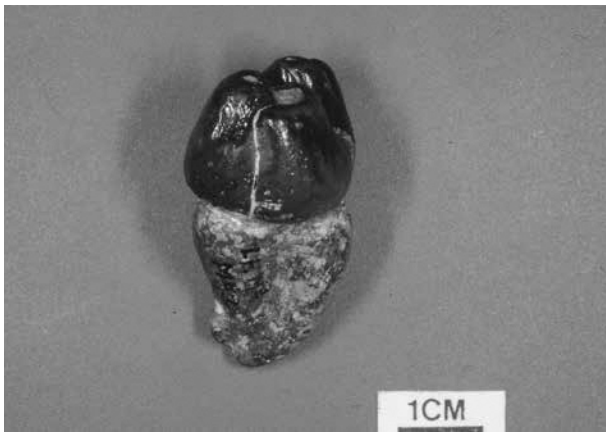


図９　ヤマガタダイガイギュウ右上顎第３臼歯

グ助教授に写真と臼歯化石を転送したと伝えてきた。

そして、ドムニングから手紙が届いた。驚くことに山形の化石は彼が追い求めていた、北太平洋の海牛の進化におけるミッシングリンク（失われた環）かもしれないというのだ。手紙からもその興奮が伝わってくるようだった。ドムニングは1978年にカリフォルニア大学から約180ページの大論文「北太平洋の海牛の進化」を出版していた。その年は奇しくもヤマガタダイカイギュウが発見された年であり、彼の論文を待っていたかのように化石が発見されたことになる。手紙には「山形の新標本は18世紀にベーリング海で絶滅したステラーカイギュウの先祖で、しかも進化の移行過程を示す未知の化石の可能性が大きい」と記してあった。

図10　ヤマガタダイガイギュウ右上顎第１～第３臼歯

ドムニングはその論文によって北太平洋の海牛化石を総括し、それまで個別に研究されてきた北太平洋の海牛化石を進化の糸でつないで見せた。

北太平洋の海牛は、熱帯性のジュゴンやマナティーと異なり寒冷適応を最大の特徴とする。この系統（ヒドロダマリス亜科）は体躯を巨大化するとともに、歯と指骨の消失という特異な進化を遂げた。ドムニングはこの系統を２つの属にまとめた。それは歯と指を持つドシシーレン属（*Dusisiren*）と、体長10mにもなる巨大海牛で歯と指骨を失ったヒドロダマリス属（*Hydrodamaris*）である。彼は北太平洋の海でドシシーレンがヒドロダマリスへ進化したシナリオを想定したが、その考えは現在も引き継がれている。

そして両属には形質の差が大きいため、橋渡しをする中間種が存在するはずだと考えていたのだった。山形の化石は、まさに失われた空白を埋める重要な化石かもしれないというのだ。1970年代までは、日本を含めて北西太平洋での海牛化石の産出はほとんど知られていなかったが、ヤマガタダイカイギュウの発見によって、寒冷型の海牛が北へ向かい、ベーリング海から南下して、ついに日本にたどり着いたことが確実になった。そして中間的形質を備えるヤマガタダイカイギュウは、日本や北西太平洋が海牛の進化の重要な舞台であることを明らかし、日本の海牛化石研究を大きく前進させる原動力となった。

図11　米国ハワード大学ドムニング博士の記念講演会（1982年８月８日）

もし斎藤が山形大学に赴任しておらず（幸運19）、もし高橋が斎藤ではなく他の古生物研究者に相談していたなら（幸運20）、もし斎藤がテッドフォードに化石の照会をしなかったなら（幸運21）、もしテッドフォードがドムニングに情報を転送しなかったなら（幸運22）、またもしドムニングの北太平洋の海牛化石研究を完成させていなかったなら（幸運23）、ヤマガタダイカイギュウは正しい評価を得られなかったか、または評価に長い時間を要し、1986年に新種の論文は完成できなかったであろう。

1979年５月下旬から開展した特別展「化石展」によって、ヤマガタダイカイギュウは初めて一般公開された。特別展は学芸員が企画し、展示資料を選定し、図録を執筆し、展示法を検討、そして展示の解説を書かねばならない。さらに高橋には、展示するための“未知の大型化石”の整理作業まで重なっていたはずである。その頃の高橋が多忙を極めたこと

図12　初めて化石を見るドムニング氏（1982年８月１日）
左：大友義助館長　右：高橋学芸員

は想像に難くない。特別展は好評を博し会期を急きょ延長したという。本館50年の歴史の中で、会期を延長した特別展は唯一この展示だけだったと思われる。特別展の後に、ヤマガタダイカイギュウは発掘時の骨格の配列状態を示す産状標本として特注のケースに収められ常設展示された。

1979年秋、日本地質学会にて「山形県大江町から産した大海牛化石について」という演題で、高橋は新化石を報告した。山形での新発見は全国的にも注目されていた。個人講演の会場は聴衆で溢れ、立ち見が出るほどだったという。化石が科学の大舞台に上がった。

調査研究から常設展示へ

ヤマガタダイカイギュウは、1979年頃までは産状標本としてクリーニングされて常設展示化されたため、全ての部位が取り出されてはいなかった。しかし、それまでの作業の結果、頭骨を含む体の前半部分がほぼ完全に保存されていることが確実であった。特に頭骨は重要で、種の特徴が明瞭に残る部位である。地層中の骨格の配列を見ると、本来は全身が揃って地層中にあったと考えられるが、地上に露出後に最上川の侵食のために、胸椎の後部から尾椎にかけての後半部は失われていた。もし逆に前半部が失われていたならば（幸運24)、新種の海牛の証拠は失われていただろう。

1980年以降の動きを駆け足でたどる。ヤマガタダイカイギュウについては、その古生物学的意義とともに、地質年代や古環境を明らかにするために年次計画による調査研究が実施された。その中には、米国ハワード大学のドムニングの調査のための招聘事業も含まれていた。彼の調査への参加によって新種文への道が大きく拓かれた。

1980年　化石の発掘現場周辺の地質調査、化石の年代調査、残りの海牛化石の有無の調査、本郷層産の化石調査などを実施。この年の地質調査で、用橋から50mほど下流の右岸で、また大型の骨化石が発見された。脊椎骨や肋骨の一部が露出しており、当初は海牛化石の２体目か、と報道されたという。この化石の存在については、地元の人がすでに知っていたらしい。

1981年　周辺の地質調査等を継続して実施。そして、河床の大型化石の発掘が急遽計画された。化石は前回の発掘の経験をもとに、準備は比較的スムーズに進んだが、天候に左右されて発掘作業が８月22日から９月８日までを要した。化石のクリーニングはヤマガタダイカイギュウの整理と並行して行われた。作業期間は1981年10月から1982年３月で、その間に下顎骨、肋骨、椎骨などが取り出された。それらから海牛ではなく鯨であることが判明した。後に長澤はその化石を研究し、ヒゲ鯨類のナガスクジラ科であることを報告した。なお鯨を発掘したその年も、また1980年代も上流の海牛発掘現場は一度も干上がらなかったという。

1982年　前年に引き続いて地質調査が実施された。また、古生物学的な調査のために調査委員会が組織されている。委員は横浜国立大学・長谷川善和教授（脊椎動物化石)、国立科学博物館･上野輝弥室長（魚類化石)、新庄工業高校・鈴木雅宏教諭、山添高校・植松芳平教諭、県自然保護課・田宮良一補佐などである。

1982年の夏にドムニングが来日した。期間は８月１日から８月10日である。来日当時、ヤマガタダイカイギュウはレリーフ状に主な骨格の輪郭が掘り込まれていたが、まだ重要な部位が埋もれていた。

図13　第１展示室での調査　子どもがのぞき込む姿が微笑ましい（1982年８月２日）
左：ドムニング氏　右：高橋学芸員

図14　調査員総出のクリーニング作業
左：山形大学　斎藤常正教授

ドムニングの指導の下で重要部位の取り出し作業

が始まったが、彼の滞在期間が限られているため、作業は時間との戦いとなった。８月２日の午後から５日にかけてクリーニングが実施されたが、調査委員も含めたまさに総出の作業となった。ドムニングは特に頭骨と前肢骨に注目していた。作業の進行とともに多くの部位が取り出された。

８月５日の夕刻に決定的な骨をドムニング自身が掘り出した。「これこそ私が探していた指の骨だ」と言ってそれを皆に示したという。化石は縮小し消滅しかけた小石のように小さな指の骨だった。その骨はまさにヒドロダマリス海牛の指骨の縮小を示す重要な証拠だった。ドムニングはその後も次々に指骨を発見したという。それまでヒドロダマリス系統の指骨は、アメリカのジョルダンカイギュウで１個が見つかっているだけだった。

数日の集中した作業によって、頭骨、下顎骨、臼歯、前肢骨、手根骨、中手骨、そして指骨が取り出された。これらによって化石は新種であることがほぼ確定した。もしドムニングが来日していなかったなら（幸運25)、もしドムニングが指骨を発見しなかったなら（幸運26)、ヤマガタダイカイギュウは新種の海牛として認知されなかったかも知れない。

図15　ドムニング氏が指の骨を発見（1982年８月５日）
左：横浜国立大学　長谷川善和教授

８月６日の調査委員会で化石の和名が検討された。“ヤマガタダイカイギュウ”という名前はこの時に決まったという。そして、翌７日に名称の発表と記者会見が開催された。ドムニングの調査は大きな成果を残し、彼は８月10日に慌ただしく日本を後にした。それらの調査結果について、高橋静夫（ヤマガタダイカイギュウ)、田宮良一(地質)、上野輝弥(サメ化石)、小笠原憲四郎（貝化石)、秋葉文雄（珪藻化石年代)、斎藤常正（古環境)、の各論文によって「ヤマガタダイカイギュウ発掘調査報告書」がまとめられ1983年３月に発行された。

図16　クリーニング時の右前肢の中手骨と指骨部分の産状（1982年８月５日）

1983年～1986年　ヤマガタダイカイギュウの常設展示に向けて、骨格レプリカと産状レプリカの製作と展示室の改装の事業が予算化された。1983年に化石の産状レプリカの製作が始まり、同年10月に完成（委託：西尾製作所)。11月より化石整理やクリーニング作業が学生作業員の協力を得て急ピッチで行われ、1984年３月までに完了。なお、母岩にはまだ肋骨などが密集しているため、重なった骨の一方を壊しては接着・復元を繰り返すという根気と慎重さが求められる作業が続いた。また並行して各骨の計測及び実測図の作成を進めて４月までにほぼ完了。

次に全身復元骨格を組み上げるために、各部位骨のレプリカ製作が始まり、化石の型取り作業が８月に完了。次に欠損部分の復元、及び欠損している体の後半部分の復元の検討。現生海牛類、化石の骨格の調査を行い、基本的に欠損部分をジョルダンカイギュウ骨格の0.86倍で復元する方針を決定。出来上がった各部位のレプリカから交連骨格の組み上げ作業。そして、1985年３月に全身骨格標本が完成した（委託：西尾製作所)。

図17　右前肢の中手骨と指骨の掌側面の構成を再現

高橋はこれらの仕事の隙間を縫うように、1985年４月から開催予定の特別展「化石が語る太古のロマ

ン」のために奔走していた。図録の執筆等、展示準備にも忙殺されたに違いない。特別展は４月下旬から６月下旬にかけて開催され、好評のうちに閉幕した。その後、ヤマガタダイカイギュウは第１展示室の入口付近に、全身骨格と産状標本が常設展示された。観覧者の視野に大きく飛び込んでくる迫力ある展示は、現在まで引き継がれている。

これで物語は終わりではない。最後の大仕事が残されていた。新化石の発見後の重要な仕事は記載論文を完成させることであり、それなくしては科学の世界で「新種」として認知されない。高橋は研究の成果をドムニングと斎藤との共著で日本古生物学会欧文誌に投稿し、査読後に受理され1986年に公表された。これと並行して、高橋は解説普及書の執筆も進めて「ヤマガタダイカイギュウ」を完成させ、1986年３月に本館より発行された。

図18　和名“ヤマガタダイガイギュウ”の発表と記者会見（1982年８月７日）

おわりに

ヤマガタダイカイギュウの物語は、これから本館が続く限り、そして古生物学という科学が続く限り語り継がれるはずである。最後に最大の幸運を忘れてはならない。もしヤマガタダイカイギュウが高橋先生に出会わなければ（幸運27）、もしそれぞれの場面で先頭に走り続ける高橋先生がいなければ（幸運28）、やはりこの化石を現代に泳がせることはできなかったであろう。

ヤマガタダイカイギュウが拓いた研究によって、その後の日本各地で堰を切ったように海牛化石の発見が相次いだ。新種の海牛として北海道のタキカワカイギュウ *Hydrodamalis spissa*、福島のアイヅタカサトカイギュウ *Dusisiren takasatensis* が報告されるなど、その後の40年で日本の海牛化石研究は大きく発展した。山形県でも子孫の海牛化石が発見されている。1995年に戸沢村津谷の鮭川河岸の約400万年前の地層から大きな肋骨が、また1999年～2000年には庄内町科沢の立谷沢川河岸の約300万年前の地層からやはり肋骨が発見された。

筆者は高橋先生の後任として、その後14年間学芸員として勤める幸運に恵まれた。そして戸沢村の海牛化石や真室川町の鯨化石発掘調査など、博物館活動としての調査研究をすることができた。もし本館でのヤマガタダイカイギュウの調査の経験がなかったなら（幸運29）、組織的な調査を進めることはできなかっただろう。そもそも、もし本館にヤマガタダイカイギュウが存在しなかったなら（幸運30）、筆者は古生物研究など行っていなかっただろう。ヤマガタダイカイギュウは多くの化石研究者を呼び寄せてくれた。彼らとの交流は、未知の化石研究の様々な扉を開いてくれたのだった。

図19　ドムニング氏の離日を前にして職員との集合写真　前列左より高橋学芸員　大友館長　ドムニング氏　斎藤教授　吉野智雄業務課長（1982年8月10日）

図20　ヤマガタダイカイギュウ全身骨格レプリカの完成と搬入　左から西尾製作所西尾邵吉氏　高橋主任学芸員　奥山武夫学芸員（1985年3月15日）

付　記　2021年12月、久し振りに高橋先生が来館された。今年お元気に80歳を迎えられた。そして懐かしそうに発掘当時のお話を語ってくださった。ヤマガタダイカイギュウは多くの幸運があった中で、一つだけ不運があったという。それは左前肢のことである。

化石はクリーニングの進行とともに全容が明らかになってきた。その姿勢は背面を上にした腹這い状態で埋もれており、上半身がほぼ完全な交連骨格として保存されていた。ただ、頭部は頸椎から離れて脊柱の方向と直交するように接しており、さらに天地が逆転して頭骨・下顎の腹側が上を向いていた。そのため頸椎の配列にも乱れがあった。そして、重要な右前肢は胸（肋骨）の下にあった。まるで自分の大事な手を守っていたかのようだったという。高橋先生は大きな身振りを交えて教えてくださった。ドムニングが掘り出した右の指骨は、その胸の下で眠っていたものだった。

だが、左前肢は側方へ張り出していた。そして左前肢の先端の掌の部分は、最初に掘り込んだ化石の周りの溝の部分にあったらしい。そのため、運悪く掘削作業で失われた可能性が大きいというのだ。

「あの頃は何もかも夢中だったからなあ」と、高橋先生は遠くを見るように残念そうに語ってくれた。それでも、右手がほぼ完全に残されていたことは何よりの幸運だった、と筆者には思えて仕方がなかった。

謝　辞　本稿をまとめるにあたり、高橋静夫先生に化石をめぐるさまざまな事柄についてご教示いただきました。また原稿をお読みいただき、誤りを訂正していただきました。また当時の貴重な写真をご寄贈いただきました。吉見愼太郎先生には発掘当時の記録についてご教示いただきました。ここに記して厚くお礼申し上げます。そして、本文に登場した方々、また本文で紹介できなかったヤマガタダイカイギュウについてご協力いただいた多くの方々に改めて感謝申し上げます。

参考文献

Domning, D. P. “Sirenian evolution in the North Pacific Ocean”(*University of California Publication in Geological Sciences*/1978)

Furusawa, H. “A new species of Hydrodamalinae sirenia from Hokkaido, Japan”(*Takikawa Museum of Art and Natural History* /1988)

Kobayashi, S., Horikawa, H. and Miyazaki, S. “A new species of sirenia (Mammalia; Hydrodamalinae)” from the Shiotsubo Formation in Takasato, Aizu, Fukushima Prefecture, Japan(*Journal of Vertebrate Paleontology*/1985)

長澤一雄「山形県大江町の上部中新統から産出したヒゲ鯨類化石」（『山形県立博物館研究報告』14/1991）

長澤一雄「特別展図録『大海牛・大鯨展』」（山形県立博物館 /2000）

長澤一雄「山形県立川町科沢層から発掘された脊椎動物化石」（『山形応用地質』23/2003）

Shikama, T. and Domning, D. P. Pliocene sirenian in Japan. *Transactions and Proceedngs of the Palaeontological Society of Japan (New Series)*, 80, / 1970

高橋静夫「特別展図録『化石展』」（山形県立博物館 /1979）

高橋静夫「特別展図録『化石が語る太古のロマン』」（山形県立博物館 /1985）

高橋静夫「ヤマガタダイカイギュウ」（山形県立博物館 /1986）

Takahashi, S., Domning, D.P. and Sito, T.“*Dusisiren dewana,* n. sp. (Mammalia:Sirenia), a new ancestor of Steller’s sea cow from the Upper Miocene of Yamagata Prefecture, northeastern Japan.” ‘*Transactions and Proceedings of the Palaeontological Society of Japan (New Series)*’ 141/1986)

山形県立博物館『ヤマガタダイカイギュウ発掘調査報告書』（1983）

山形県立博物館『山形県戸沢村産海牛化石発掘調査報告書』（1998）

山形県立博物館『山形県真室川町産鯨類化石発掘調査報告書』（1999）

山形県立博物館『山形県真室川町産マッコウクジラ類化石調査報告書』（2002）

吉見愼太郎『ヤマガタ海牛のはなし』（左沢高等学校『渓流』48/2002）

企画展等の記録

◎特別企画展　　○特別展　　□催し物展

年度／部門	考　古	歴　史	民　俗	教　育
昭和46年度	○山形県の旧石器文化をさぐる		○むかしの織物・染物展	
昭和47年度	○嶋遺跡		○子どものあそび展	
昭和48年度		○みちのくの街道展		
昭和49年度		○日本の石斧展	□春の催し物展　凧絵展	
昭和50年度	○宮坂コレクション展（米沢藩文化）	□やまがたの城下町展	○山形県のやきもの展　□鉄道錦絵と明治の風俗展 □消えゆく山形の電鉄展□やまがたの文学碑展	
昭和51年度		**○山形県100年のあゆみ展 （県政100年記念）**	□やまがたの手織展 □子どもの遊び展	
昭和52年度	□縄文文化展		○あい染と草木染展 □柴田はじめコレクション　－こけし－	
昭和53年度	□大之越古墳出土品展	○やまがたの旧石器文化から新石器文化へ	□小白川天満宮奉納資料展 □わらの民具展	
昭和54年度			□山形の民芸展	
昭和55年度		○山形の文化　－財慈恩寺展－	□やきもの展	
昭和56年度	□古代の遺跡を探る	**◎開館10周年記念特別展 山形の交通　－陸と海と空と－** ○山形の文化財　上杉藩遺宝展	□山形の染めと織物展	□英語教科書展
昭和57年度			**◎紅花のすべて展－紅花と最上川－** ○明治の山形版木展　□魚と漁具展 □土人形展－山本武コレクション	
昭和58年度	□大昔のくらし－食の道具－		○やまがたの玩具展	□山形の和算
昭和59年度		○レオナルド・ダ・ビンチ展	○あい染めとくらし展	

◎特別企画展　　○特別展　　□企画展

昭和60年度		**◎最上川－紅花の道－**	□くらしの用具　－曲げとくりもの－	□新制中学発足回顧展
昭和61年度		□古墳時代のムラとくらし	○絵馬にみるなりわいと祭り □山辺の手づかい人形	
昭和62年度	○蔵王連峰－自然と人とのかかわり－ （６部門総合展示）	○蔵王連峰－自然と人とのかかわり－ （６部門総合展示） □義光と政宗	○蔵王連峰－自然と人とのかかわり－ （６部門総合展示） □ワラとくらし	
昭和63年度	○大地に刻まれた山形の歴史		□子どもと玩具	□音楽教育のあゆみ
平成元年度			○芭蕉の時代と文化　－奥の細道300年－	
平成２年度	○日本海と山形（６部門総合展示）	○日本海と山形（６部門総合展示）	○日本海と山形（６部門総合展示） □ふるさとの和紙と工芸	□教育資料館開館10周年記念 教科書ってなんだろう
平成３年度	○鳥海山　火･花･神（６部門総合展示） □縄文のタイムカプセル－押出遺跡－	○鳥海山　火･花･神（６部門総合展示）	○鳥海山　火・花・神（6部門総合展示）	
平成４年度		□山形の志士清河八郎	**◎べにばな国体記念 やまがたと最上川－上方文化との交流－**	
平成５年度	□先人のくらし－最近の発掘調査から－			
平成６年度		○ザ・絵図－近世やまがたの風景－	□青苧衣料とくらしの美	□生活画の起源

平成７年度	○新発見考古速報展95古代人の原像 －かお、手、あし－		□なつかしの電鉄　－三山線・高畠線・湯野浜線－	
平成８年度			□竹の用と美	□やまがたの寺子屋
平成９年度	**◎ねんりんピック協賛日本最大の土偶** □縄文土器の一生			□文集に見るやまがたの子どもたち
平成10年度	**◎国重要文化財指定記念 西ノ前遺跡の縄文のヴィーナス**		□やまがたの印刷文化	○藩校　－武士の学校・江戸の学問－
平成11年度	□やまがたの土偶		○紬の世界　－伝統の技と美－	□学校と教科書の歴史
平成12年度			□東北の伝統こけし	
平成13年度			○山形の屏風絵展	□じいちゃん、ばあちゃんの子供時代
平成14年度	□小山崎遺跡発掘調査速報展		○ちょっと昔の道具たち －大正・昭和のくらしの道具－	
平成15年度		○最上川舟運を支えた人・物・心		**□藤沢周平とやまがた**
平成16年度	○飛島－自然と文化の宝箱－ （６部門総合展示）	○飛島－自然と文化の宝箱－ （６部門総合展示）	○飛島－自然と文化の宝箱－ （６部門総合展示）	
平成17年度				○戦争と子どもたち －学校・くらし－
平成18年度	○新春特別展　縄文の美		□企画展　ばんどり－庄内の美と歴史－	
平成19年度		○若松寺の歴史と遺宝	□隠明寺凧	
平成20年度	□企画展　修験の山・金峯山の秘宝	□修験の山・金峯山の秘宝 □埋もれていた米ものがたり	**◎世界遺産育成企画 最上川と人びとのくらし**	□少年雑誌にみる戦中・戦後
平成21年度	□共同企画　縄文ヴィーナス誕生の地を探る	○山寺　－歴史と祈り－		
平成22年度	□縄文のキセキ		□やまがたの人形展	○開館30周年記念展 三島通庸と洋風学舎
平成23年度	□発見！ほりだされた山形の宝	○出羽国成立以前の山形 （開館40周年記念）	□あかり物語	
平成24年度		○出羽国成立1300年	□豊穣と祈り	□山形師範学校 －教育県やまがたの歩み－
平成25年度		□最上川流域の文化と景観	○雪害調査所 －松岡俊三の戦い、そして地域振興の民芸品－	□教育資料館　新コレクション展

◎プライム企画展　○特別展　□企画展

平成26年度		**◎未来に伝える山形の宝－精神と美－**	○やまがたの凧	○戦後復興とやまがたの学校
平成27年度	**◎「縄文の女神」と「遮光器土偶」**			
平成28年度	**◎よみがえる古（いにしえ）の 大寺院「寶幢寺（ほうどうじ）」至宝展**	○京（みやこ）と山形の交流 ～伝えられたやきもの～	○出羽三山－生まれかわりの旅－	□女子教育のあゆみ
平成29年度	□自然の色とかたち		**◎ GAGAKU　－やまがたに息づく宮廷文化－**	
平成30年度				○明治150年記念特別展 明治の山形県師範学校
令和元年度	□やまがたの城		**◎華のやまがた－花き産業、その美の創造－**	
令和２年度			（次年度へ延期）	
令和３年度			**◎紅と藍　－くらしを彩る－**	

◎特別企画展　　○特別展　　□催し物展

年度／部門	地　学	植　物	動　物	そ の 他
昭和46年度		○第１回　山形県のおしば展		○夏休み展　1971
昭和47年度	○鳥海山の自然展	○第２回　山形県のおしば展	○地球上の生物のあゆみ展 ○庄内海岸の魚類展	○夏休み展　1972
昭和48年度		○第３回　山形県のおしば展	○庄内海岸の動物と自然	○新収蔵展 ○夏休みの学習展1973
昭和49年度		○第４回　山形県のおしば展 □山と花の写真展	□県産淡水魚展	○夏休み学習展1974 ○私のコレクション展〈春のあそび具　こま〉〈千社札〉〈絵馬〉〈押絵展〉〈徳利展〉
昭和50年度	□鳥海火山展	□薬草展 □第５回　山形県のおしば展	□やまがたの野鳥展　1975	□新収蔵品展　1976 □夏休み学習展　1975
昭和51年度	□やまがたの火山展	□洋蘭図譜池田コレクション展 □第６回　山形のおしば展	□やまがたの野鳥展　1976 □日本と外国の海の貝展	□新収蔵品展　1977 □第６回夏休み学習展
昭和52年度	□古生代・中生代の岩石 □やまがたのいん石展	□洋ラン展　1977 □第7回やまがたのおしば展	□やまがたの野鳥展　1977	□新収蔵品展　1978 □第７回　夏休み学習展
昭和53年度	□ヒマラヤの自然展 □新生代の岩石	□洋ラン展　1978 □第8回やまがたのおしば展		□新収蔵品展　1979 □第８回　夏休み学習展
昭和54年度	○化石展	□山下コレクション展 □洋ラン展　1979	□昆虫展－フィリピンとニューギニアのチョウ－	□第９回　夏休み学習展
昭和55年度	日本列島の誕生を探る	□洋ラン展　1980 □第10回山形のおしば展・シダのなかま	□山形の動物展	□新収蔵品展　1981 □第10回　夏休み学習展
昭和56年度		□山形のおしば展1982 □洋ラン展　1981	□昆虫展－チョウとカブトムシと－	□子どもの作品展（夏休み自由研究）
昭和57年度		□洋ラン展　1982 □ブナ林の植物から		□新収蔵品展　1983
昭和58年度		山形のおしば展・湿原の植物	□海辺の動物展	□新収蔵品展　1984
昭和59年度		□山形のおしば展・最上川の植物	□アマゾン展（動物・生活用品など）	□夏休み学習展　1984 □新収蔵品展　1985

◎特別企画展　　○特別展　　□企画展

昭和60年度	○化石が語る太古のロマン	□山形のおしば展・飛鳥の植物	□東南アジアのチョウ	□新収蔵品展　1986
昭和61年度		□山形のおしば展・奥山寺の植物	□野鳥－人とのかかわり－	□新収蔵品展　1987
昭和62年度	○蔵王連峰－自然と人とのかかわり－（６部門総合展示）	○蔵王連峰－自然と人とのかかわり－（６部門総合展示） □山形のおしば展・シダ植物	○蔵王連峰－自然と人とのかかわり－（６部門総合展示） □霞城公園の動物	□新収蔵品展　1988
昭和63年度		□やまがたのおしば展・月山の植物	□山形県のチョウとガ	□新収蔵品展　1989
平成元年度	□宮沢賢治と岩石・鉱物	□やまがたのおしば展・御所山の植物	□世界のこん虫展	□新収蔵品展　1990
平成２年度	○日本海と山形（６部門総合展示）	○日本海と山形（６部門総合展示） □やまがたのおしば展・琵琶沼の植物	○日本海と山形（６部門総合展示）	□新収蔵品展　1991
平成３年度	○鳥海山　火・花・神（６部門総合展示）	○鳥海山　火･花･神（６部門総合展示） □第21回　やまがたのおしば展	○鳥海山　火・花・神（６部門総合展示） □野鳥展	□新収蔵品展　1992
平成４年度	□鉱物の世界	□第22回　やまがたのおしば展		□新収蔵品展　1993

平成５年度	○鯨の世界－その進化と現在－	□やまがたのおしば・植物画1993	□やまがたの昆虫	□新収蔵品展　1994
平成６年度		□やまがたのおしば・植物画1994		□新収蔵品展　1995
平成７年度	□鯨、やまがたを泳ぐ	□やまがたのおしば・植物画1995		□新収蔵品展　1996
平成８年度		□やまがたのおしば・植物画1996	○悠久の流れを泳ぐ－やまがたの淡水魚－	□新収蔵品展　1997
平成９年度		○ブナの森への招待状 □やまがたのおしば・植物画1997	□水辺の生きものたち	□新収蔵品展　1998 □巡回展－かはくトラベルミュージアム－
平成10年度	□やまがたの化石物語	□やまがたのおしば・植物画1998		□新収蔵品展　1999
平成11年度		□国立科学博物館植物画展		□館蔵品展　1999
平成12年度	○大海牛・大鯨展		□貝－海からの贈りもの	□館蔵品展　2000
平成13年度		□山形の植物－結城嘉美コレクション－		□館蔵品展　2002
平成14年度			□追われる生きものからのメッセージ	□館蔵品展　2003
平成15年度	□化石がささやく海物語			□館蔵品展（１期） □館蔵品展（２期）
平成16年度	○飛島－自然と文化の宝箱－ （６部門総合展示）	○飛島－自然と文化の宝箱－（6部門総合展示） □タネにまつわるエトセトラ	○飛島－自然と文化の宝箱－ （６部門総合展示）	□館蔵品展　2005
平成17年度				□館蔵品展　2006 （粉から粉への道具あれこれ） （おまけになった生き物）
平成18年度		○新種発見物語 －やまがたのナチュラリストのあゆみ－		□新コレクション展
平成19年度		□蘭の図譜 □清水大典と冬虫夏草	□庄内博物誌	
平成20年度		○庄内の自然 □蘭の図譜		
平成21年度		□庄内砂丘と海岸林 －クロマツ林の歴史と自然－	□貝の世界　－加藤繁富コレクション－	◎特別巡回展　山形の宝もの展 □私の宝物　2009
平成22年度	□うつくしい鉱物と岩石		□貝の世界　－加藤繁富コレクション－	□私の宝物　2010
平成23年度			○昆虫－魅惑のいきものたち－	□私の宝物　2011
平成24年度			□石沢慈鳥と鳥類	□私たちのたからもの
平成25年度			□やまがたの野生動物	□私たちのたからもの

◎プライム企画展　○特別展　□企画展

平成26年度				□私たちのたからもの
平成27年度	○化石－太古の不思議な生き物たち－		□蝶と蛾　妖精たちのつどい	□私たちのたからもの
平成28年度	□山形の災害			□私たちのたからもの
平成29年度			○森の妖精－不思議な生き物、粘菌－	□私たちのたからもの ○自然の色とかたち
平成30年度	◎ヤマガタダイカイギュウと人魚たち			□第１回やまはくセレクション展 □私たちのたからもの
令和元年度				□第２回やまはくセレクション展
令和２年度			○奇妙で変てこな生きものたち	□第３回やまはくセレクション展
令和３年度		○1971　－やまはく誕生物語－		□第４回やまはくセレクション展

展示図録の記録

発行年度	展示図録「タイトル」		
昭和49年度	特別展「日本の石斧展」		
昭和51年度	特別展「山形県政100年のあゆみ展」		
昭和54年度	特別展「化石展－サンショウウオからクジラまで－」		
昭和55年度	特別展「山形の文化財－慈恩寺展－」		
昭和56年度	**開館10周年記念特別展「山形の交通－陸と海と空と－」**	特別展「山形の文化財－上杉藩遺宝展－」	
昭和57年度	特別展「紅花のすべて展－紅花と最上川－」		
昭和58年度	特別展「やまがたの玩具展」		
昭和60年度	特別展「最上川　－紅花の道－」	特別展「化石が語る太古のロマン」	
昭和61年度	特別展「絵馬にみる　なりわいと祭り」	解説書「ヤマガタダイカイギュウ」	
昭和62年度	特別展「蔵王連峰－自然と人のかかわり－」	企画展「義光と政宗－その時代と文化－」	
昭和63年度	特別展「山形の大地に刻まれた歴史」		
平成元年度	特別展「奥の細道300年　芭蕉の時代と文化」		
平成２年度	特別展「日本海と山形－その生い立ち・自然と文化を考える－」		
	教育資料館開館10周年記念企画展「教科書ってなんだろう」		
平成３年度	特別展「鳥海山－火・花・神－」	企画展「縄文のタイムカプセル－押出遺跡－	
平成４年度	特別展「やまがたと最上川　－上方文化との交流－」		
平成５年度	特別展「鯨の世界－その進化と現在－」	企画展「やまがたの昆虫」	
平成６年度	特別展「ザ・絵図　－近世やまがたの風景－」	企画展「青苧衣料とくらしの美」	
平成７年度	特別展「古代人の原像－かお・手・あし－」		
平成８年度	特別展「悠久の流れを泳ぐ－やまがたの淡水魚－」		
平成９年度	特別展「ブナの森への招待状」		
平成10年度	**特別企画展「－国重要文化財記念－西ノ前遺跡の縄文ヴィーナス」**	特別展「藩校－武士の学問･江戸の学問－」	
平成11年度	特別展「紬の世界－伝統の技と美－」		
平成12年度	特別展「大海牛・大鯨展－海で進化する哺乳類－」		
平成13年度	特別展「山形の屏風絵展－もてなしの心と美の世界－」		
平成14年度	企画展「追われる生きものからのメッセージ」		
平成15年度	特別展「最上川舟運を支えた人・物・心」		
平成16年度	特別展「自然と文化の宝箱　飛島」		
平成17年度	特別展「戦争と子どもたち」		
平成18年度	特別展「新種発見物語」		
平成19年度	特別展「若松寺の歴史と遺宝」		
平成20年度	**世界遺産育成企画「最上川と人びとのくらし」**	特別展「庄内の自然」	
平成21年度	特別展「山寺－歴史と祈り－」	企画展「私の宝物」	特別巡回展「山形の宝もの」
平成22年度	**教育資料館開館30周年記念「三島通庸と洋風学舎」**	企画展「縄文のキセキ」	企画展「私の宝物2010」
平成23年度	**開館40周年記念「出羽国成立以前の山形」－山形と東北大学所蔵重要考古資料－**		
平成23年度	企画展「私の宝物2011」		
平成24年度	特別展「出羽国成立1300年」	企画展「豊穣と祈り」	企画展「私たちのたからもの」
平成25年度	特別展「雪害調査所－松岡俊三の戦い、そして地域振興の民芸品－」		
	企画展「最上川流域の文化と景観」	企画展「やまがたの野生動物」	
平成26年度	プライム企画展「未来に伝える山形の宝－精神（こころ）と美－」		
平成27年度	企画展「私たちのたからもの」		
平成28年度	プライム企画展『よみがえる古の大寺院　「寶幢寺」至宝展』		企画展「私たちのたからもの」

研究報告の記録

昭和47年度	研究報告第１号	発行年月日	昭和48（1973）年３月20日（火）

目次
高橋　多蔵「山形県天童市原崎沼に越冬する鴨類について」
白畑孝太郎「山形県立川町におけるギフチョウ属のスギ造林に因る衰退」
菅井敬一郎「山形県南西部地域の熱変成岩の岩石学的研究」
佐々木洋治「山形県における縄文草創期文化の研究Ⅰ」

昭和48年度	研究報告第２号	発行年月日	昭和49（1974）年３月20日（水）

目次
高橋　多蔵「庄内浜の鳥類について」
白畑孝太郎「山形県の革翅目」
吉野　智雄、布施　　隆「山形県の帰化植物」
菅井敬一郎「山形県米沢市東部地域の変成岩類」

昭和49年度	研究報告第３号	発行年月日	昭和50（1975）年３月20日（木）

目次
大友　義助「新庄東山焼について」
佐々木洋治「山形県における縄文草創期文化の研究Ⅱ」
板垣　英夫「山形県の土人形」
菊地　律郎「生活のなかに見られるトロロ食について」

昭和50年度	研究報告第４号	発行年月日	昭和51（1976）年３月20日（土）

目次
佐藤　信一「地方公共博物館の性格と機能」
大友　義助「羽州山寺の庶民信仰について」
高橋　多蔵「山形県産鳥類の未記録種について（１）」
白畑孝太郎「山形県山辺町琵琶沼の蜻蛉目相（第１報）」
菅井敬一郎「山形県産の変成岩および花崗岩質岩のＫ－Ａｒ年代」

昭和58年度	研究報告第５号	発行年月日	昭和59（1984）年３月31日（土）

目次
展示改装整備事業報告
結城　嘉美「草木塔の調査報告」

昭和59年度	研究報告第６号	発行年月日	昭和60（1985）年３月30日（土）

目次
業務課「教育資料館展示整備事業報告」
金山　耕三「寒河江・西村山地区の絵馬－獅子ヶ口諏訪神社を中心に－」
大友　義助「若勢の押休みについて再論－藩政後期、庄内地方における農業雇用労働の一形態」
野口　一雄「資料紹介　佐藤利兵衛家紅花文書」

昭和60年度	研究報告第７号	発行年月日	昭和61（1986）年３月30日（日）

目次
高橋　静夫「ヤマガタダイカイギュウ化石整備事業報告」
木俣　　繁「山形県の蛾類分布資料（１）」
野口　一雄「山形県における木地物・曲物・刳物の製作－近世期を中心に－」
松田　源恵「山形県師範学校初代校長斎藤厚信遺稿について」
金山　耕三「資料紹介　最上川絵図」

昭和61年度	研究報告第８号	発行年月日	昭和62（1987）年３月30日（月）

目次
長澤　一雄「第四紀常設展示の一部展示替えについて」
木俣　　繁「山形県の蛾類分布資料（２）」
野口　一雄「絵馬にみるなりわいと祭り」
萩野　和夫「高擶城の興亡について－戦国争乱期を中心として－」
加藤　　稔「古代出羽国に関する二・三の問題」

昭和62年度	研究報告第９号	発行年月日	昭和63（1988）年３月30日（水）

目次
木俣　　繁「山形県の蛾類分布資料（３）」
長澤　一雄「村山市碁点から産出したナウマンゾウ臼歯化石」
長澤　一雄、矢野　勝俊「蔵王山丸山沢で発生した雪崩」
長澤　一雄、大場与志男、加藤　　啓「滝山火山の火砕岩からのアラゴナイトの産出」
長澤　一雄「蔵王火山の形成過程－1987年特別展「蔵王連峰」のなかから」
野口　一雄「山形県の作占い」
加藤　　稔「明石・岩宿・大隈以前－日本旧石器文化存否論・前史－」

昭和63年度	研究報告第10号	発行年月日	平成１（1989）年３月30日（木）

目次
木俣　　繁「山形県の蛾類分布資料（４）」
長澤　一雄、大場与志男「蔵王温泉酢川変質帯から産出した透明石膏」
長澤　一雄、高橋　啓一「山形県産の長鼻類臼歯化石」
加藤　稔「14Ｃ年代からみた最上川流域の先史・原史学的編年」
菊池　和博「梅津コレクションにみる相良人形の形態的分析」
山形県立博物館研究報告　第１－10号　総目録

平成元年度	研究報告第11号	発行年月日	平成２（1990）年３月30日（金）

目次
長澤　一雄「山形県村山市碁点から産出した長鼻類の大腿骨化石」
長澤　一雄、山野井　徹「山形県天童市原崎の上部中新統山口層から産出した昆虫化石」
木俣　　繁「山形県の蛾類分布資料（５）」
菊池　和博「山形県手漉き和紙の歴史的変遷の考察」
加藤　　稔「最上川流域の古墳時代史」

平成２年度	研究報告第12号	発行年月日	平成３（1991）年３月30日（土）

目次
竹村　健一「山形県立博物館附属自然学習園・琵琶沼の植物」
長澤　一雄「山形県大江町の上部中新統から産出したヒゲ鯨類化石」
木俣　　繁「山形県の蛾類分布資料（６）」
菊池　和博「山形県手漉き和紙の現状」
佐藤　陽子「企画展『教科書ってなんだろう』における「山形と教科書」の展示について」
加藤　　稔「東北日本の細石刃文化の展開」

平成３年度	研究報告第13号	発行年月日	平成４（1992）年３月30日（月）

目次
竹村　健一「船形山系の偽高山帯における植物群落について報告」
長澤　一雄「山形県酒田市沖の日本海海底から得られた現生コイワシクジラの頭蓋」
長澤　一雄、奥山武夫、矢野勝俊
「山形県立博物館における蔵王の樹氷原ジオラマとそれに関する雪氷展示の製作について」
木俣　　繁「山形県の蛾類分布資料（７）」
菊池　和博「近世最上川の文化史的考察」
川瀬　　同「山形水野藩秋元家文書と秋元家について」

平成４年度	研究報告第14号	発行年月日	平成５（1993）年３月20日（土）

目次
竹村　健一「琵琶沼湿原の植物群落に関する報告」
長澤　一雄「山形県大蔵村の鮮新統野口層から産出したヒゲ鯨類の尾椎化石」
木俣　　繁「山形県の蛾類分布資料（８）」
菊池　和博「青苧の生活文化史」
川瀬　　同「山形水野藩剣術師範役田嶋岩尾とその門弟について」

平成５年度	研究報告第15号	発行年月日	平成６（1994）年３月20日（日）

目次
竹村　健一、石黒真祐美「熊野長峰湿原群における植物群落についての報告（予報）」
長澤　一雄「山形県庄内海岸に漂着した鯨類」
長澤　一雄「山形県真室川町の大型鯨類化石」
菊池　和博「釈迦如来坐像及び黄檗宗佛心寺の考察」
川瀬　同「『御巡見使』関係文書紹介」

平成６年度	研究報告第16号	発行年月日	平成７（1995）年３月31日（金）

目次
竹村　健一、石黒真祐美「鶴岡市熊野長峰湿原群における植物群落についての報告」
竹村健一、大高　　滋「山形空港内の興味ある植物についての報告」
長澤　一雄「山形県戸沢村下部鮮新統産のヒゲ鯨類下顎骨化石」
長澤　一雄「山形県大江町上部中新統産のヒゲ鯨類下顎骨化石の再検討」
渡部　史夫「近世における最上苧の生産と流通」

平成７年度	研究報告第17号	発行年月日	平成７（1995）年６月30日（金）

目次
菊池　和博「伝説と史実の対話－与次郎稲荷神社と久保田城主佐竹義宣」
渡辺　　信「昭和初期　山形県長瀞小学校における絵画教育について…想画から生活画へ…」
川瀬　　同「水野藩　太田家文書の紹介－とくに転封関係文書を中心にして－」

平成８年度	研究報告第18号	発行年月日	平成８（1996）年６月30日（日）

目次
金山　耕三「明治～昭和初期　山形市内無尽講資料」
長澤　一雄、小山田正幸「山形県大江町の上部中新本郷層産のオウナガイ化石とその変異」
長澤　一雄「山形県真室川町の大型鯨類化石－1994年の第２次発掘調査－」
川瀬　　同「山形水野藩　太田家文書の紹介（２）」
渡部　史夫「近世期、村山地方における漆の生産と流通」

平成９年度	研究報告第19号	発行年月日	平成９（1997）年６月30日（月）

目次
長澤　一雄「山形県の鯨類化石と古環境の変遷」
矢部　英生、長澤　一雄「山形県山形市の成沢層（中部中新統）から産出した板鰓類化石」
遠藤　正淑「山形県立博物館におけるボランティア活動」
遠藤　正淑「山形の竹細工－平成8年度企画展「竹の用と美」の調査から－」
渡辺　　信「近世後期・山形の学習状況－山形城下・今泉堂を中心として－」
金山　耕三「幕末山形藩の金融関係文書－福島治助家文書から－」

平成10年度	研究報告第20号	発行年月日	平成10（1998）年10月30日（金）

目次　長澤　一雄「Measurements of the skeleton of a minke whale
（*Balaenoptera acutorostrata*) from the Antarctic Ocean」
作本　達也、長澤一雄「北海道枝幸郡沖のオホーツク海海底より発見された
Macrophthalmus (*Mareotis*) sp. オサガニ属の化石」
阿部　明彦「山形県における古墳文化研究の素描」
〈研究ノート〉阿部　明彦「玉川Ｃ遺跡出土の円錐形ポーズ土偶をめぐって」
渡辺　　信「特別展『文集に見るやまがた子どもたち』展示報告」
山形県立博物館研究報告第11～20号総目録
川瀬　　同「山形水野藩太田家文書の紹介（四）－郡方役所日記抜心得帳－」

平成11年度	研究報告第21号	発行年月日	平成12（2000）年２月29日（火）

目次　林　　成多、長澤　一雄「山形県天童市の上部中新統から産出したオオシロアリ類化石」
阿部　明彦「企画展『やまがたの土偶』展示報告」
川瀬　　同「山形水野藩　戊辰の役－資料で確かめる－」

平成13年度	研究報告第22号	発行年月日	平成14（2002）年３月31日（日）

目次　安部　　実「保管されている山形城の瓦について」
遠藤　正淑、八鍬　拓司「展示に関するアンケート調査結果について」

平成15年度	研究報告第23号	発行年月日	平成16（2004）年３月31日（水）

目次　青木　章二「本館所蔵の教育勅語謄本について」
八鍬　拓司「入館者数の推移と特別展・企画展との関連について」

平成16年度	研究報告第24号	発行年月日	平成17（2005）年３月31日（木）

目次　安部　　実「保管されている平野山小窯跡郡ほかの瓦について」
金山　耕三「御仕置五人組帳作成の具体例－「山家村五人組合連印帳」（文政七年）を中心に－」

平成18年度	研究報告第25号	発行年月日	平成18（2006）年８月１日（火）

目次　安部　　実・石原道知「注口土器の修復と彩色の分析について」
青木　章二「御真影勅語謄本『奉安』の実相－山形県の事例－」

平成19年度	研究報告第26号	発行年月日	平成20（2008）年１月31日（木）

目次　青木　章二「農村部における軍人援護教育の成立と展開
－山形県大曾根村国民学校の事例を中心に－」
吉田　　哉「山形県への帰化植物の侵入と分布の広がり」

平成20年度	研究報告第27号	発行年月日	平成21（2009）年１月31日（土）

目次　吉田　　哉「庄内砂丘の植林記念碑」
青木　章二「戦中・戦後期における少年雑誌の返遷－本館所蔵に係る『週刊少国民』
および『こども朝日』について－」
吉田　　哉「山形県への帰化植物の侵入と分布の広がり（２）－山形県初期記録資料－」
吉田　　哉「日本産ヒメグモ科（クモ綱：クモ目）の研究史」
八鍬　拓司「やまがたアートライン事業と山形県立博物館における取組について」

平成21年度	研究報告第28号	発行年月日	平成22（2010）年２月２日（火）

目次　青木　章二「創設期の鶴岡朝暘学校－三島家旧蔵の絵図をめぐって－ 」
吉田　　哉「クモ類の新種および新属記載の記録」
石山　泰規「山形県鶴岡市二ツ屋産の植物化石
－コンプトニアとリクイダンバーの多産地域と両種の考察－」

平成22年度	研究報告第29号	発行年月日	平成23（2011）年２月４日

〈地学部門〉高橋　麻美「企画展『うつくしい鉱物や岩石』にむけて－展示品の紹介－」
〈植物部門〉川上　新一「山形県産変菌類目録－ List of Myxomycetes collected from Yamagata Prefecture －」
〈考古部門〉押切　智紀「企画展『縄文のキセキ』を振り返って」
〈歴史部門〉山口　博之「中世前半期の追善仏事とそ周辺」
熊谷　水緒「近世山形に見る交通の一様相」
〈民俗部門〉秋葉　正任　調査ノート「米沢の土人形～相良と幻下小菅」
〈教育部門〉石垣　立郎「化学実験室ことはじめ」
菅野　史郎「『地域資源のデジタル化推進事業』取組み」
青木　章二「明治期の評伝類にみる三島通庸の異名ついて」

平成23年度	研究報告第30号	発行年月日	平成24（2012）年３月14日

〈博物館経営〉菅野　史郎「収蔵資料の全貌解明とデジタル化プロジェクト
－博物館収蔵資料整理事業』の概要－」
〈地学部門〉 高橋　麻美「地学収蔵庫に保管された未同定貝類化石の同定結果」
〈植物部門〉 川上　新一・鈴木　　暁「津波で被災した陸前高田市立博物館の
植物標本200点の修復作業およびその目録」
〈動物部門〉 吉田　哉「台湾産のウズグモ科（クモ綱：クモ目）」
（Yoshida, H.: The Spider Family Uloboridae (Arachnida: Araneae) from Taiwan）
〈考古部門〉 押切　智紀「大石田町玉ノ木平Ａ遺跡について－資料紹介－」
〈歴史部門〉 山口　博之「石造物の諸相－山形県に於ける中世石造物素描－」
熊谷　水緒「古文書講座の資料から－『慶長鎮東軍艦』について－」
〈民俗部門〉 秋葉　正任「山形県立博物館資料紹介－『百姓生活百年記』より－」

平成24年度	研究報告第31号	発行年月日	平成25（2013）年３月15日

〈地学部門〉 羽根田　裕「地学収蔵庫に保管された未同定植物化石の結果 」
〈植物部門〉 川上　新一・鈴木　　暁「 平成24年度琵琶沼の維管束植物調査報告 」
〈動物部門〉 吉田　　哉「山形県立博物館の動物標本」
〈考古部門〉 押切　智紀「山形市高原４号墳の出土品について 」
〈歴史部門〉 山口　博之「大楯遺跡の墳墓堂 」
熊谷　水緒「宝幢寺及び佐伯菅雄資料について 」
〈民俗部門〉 秋葉　正任「山形県立博物館資料紹介『玉手筥』と百姓生活年記について 」
〈教育部門〉 青木　章二「教育資料館所蔵の『教科書コレクション』について 」

平成25年度	研究報告第32号	発行年月日	平成26（2014）年３月18日

阿部　　進「３Ｄプリンタによる国宝『縄文の女神』の復元」
〈地学部門〉 羽根田　裕「東海林コレクションについて」
〈植物部門〉 川上　新一・鈴木 暁「長沢利英の維管束植物標本について」
〈考古部門〉 押切　智紀「大蔵村白須賀遺跡の土偶」
〈歴史部門〉 山口　博之「〈踏査ノート〉インドネシア共和国バンテン周辺の華人墓」
熊谷　水緒「平成25年度古文書講座資料の紹介」
〈民俗部門〉 秋葉　正任「山形県立博物館資料紹介『山形の伝統凧』」
野口　一雄「野盤子蓮貳坊只黄筆『愛宕山眺望之記』を読む」
〈教育部門〉 青木　章二「巡幸日誌に記された山形県の学事状況」

平成26年度	研究報告第33号	発行年月日	平成27（2015）年３月17日

〈地学部門〉 石黒　宏治「衛星データによるリモートセンシング」
〈植物部門〉 川上　新一「山形県産変形菌類目録補遺」
川上　新一・鈴木暁「新たに整理された佐藤泉の維管束植物標本について」
〈動物部門〉 奥山　武夫・吉田哉「山形県立博物館所蔵の折居彪二郎採集標本について」
Yoshida, Hajime「Parasteatoda and a new genus Campanicol Theridiidae) from Taiwan」
［吉田 哉「台湾産オオヒメグモ属および新属カネヒメグモ属（クモ目：ヒメグモ科）」］
〈考古部門〉 押切　智紀・佐藤正俊「山形県立博物館所蔵の横内遺跡出土土器について」
〈歴史部門〉 山口　博之「中国陝西省興平市霍去病墓石造物調査記」
熊谷　水緒「平成26年度古文書講座資料の紹介」
〈民俗部門〉 須田真由美「柴崎弥左衛門家寄贈雅楽譜に関する調査（中間報告）」
〈教育部門〉 青木　章二「旧山形県師範学校附属小学校講堂について」

平成27年度	研究報告第34号	発行年月日	平成28（2016）３月31日

〈地学部門〉 石黒　宏治「化石の３Ｄデータの取得と３Ｄプリンタでの化石レプリカの作製」
〈植物部門〉 川上　新一・鈴木暁「石塚末吉の維管束植物標本について」
〈動物部門〉 Hajime Yoshida　「Parasteatoda, Campanicola, Cryptachaea and two new genera (Araneae: Theridiidae) from Japan」
［吉田哉「日本産オオヒメグモ属，カネヒメグモ属，イワマヒメグモ属および2新属（クモ目：ヒメグモ科）」］
吉田　　哉「クモ類の新種および新属記載の記録（２）」
小林さやか･塚本　洋三･鶴見みや古･吉田　　哉･奥山　武夫「下村兼史が北千島パラムシル島で
採集したツノメドリ Fratercula corniculata 卵標本の採集日の検証」
奥山　武夫・吉田　　哉「山形県立博物館所蔵石沢コレクションの標本資料産地別数」
〈考古部門〉 押切　智紀「上山市牧野遺跡出土の土偶片について」
〈歴史部門〉 山口　博之「ラオス人民民主共和国ワットプー（VAT　PHOU）遺跡踏査記」
〈民俗部門〉 須田真由美「特殊木工『切畑臼』最後の職人の記録」
－山形市無形文化財調査の取材協力から－」
〈教育部門〉 青木　章二「『千歳園』園名の由来をめぐって」

平成28年度	研究報告第35号	発行年月日	平成29（2017）年３月31日

〈地学部門〉 石黒　宏治「ヤマガタダイカイギュウ化石の３Ｄデータの取得」
〈植物部門〉 山口　　真「ライスワックスの活用について」
川上　新一「山形県産変形菌類目録補遺（Ⅱ）」
山口　　真・川上　新一「奥野幸隆寄贈の維管束植物標本について」
〈考古部門〉 押切　智紀「佐藤栄太採集考古資料について」
〈歴史部門〉 山口　博之「寶幢寺旧蔵の渡来品」
佐藤　佳美「寶幢寺および佐伯菅雄資料より～山形における神仏分離の一例～
付・寶幢寺歴代住職表（16世から40世まで）」
〈民俗部門〉 須田真由美「雅楽関係の資料調査から」
〈教育部門〉 青木　章二「教部省出仕時代の齋藤篤信について」

平成29年度	研究報告第36号	発行年月日	平成30（2018）年３月30日

〈地学部門〉 石黒　宏治「化石や文化財の３Ｄ計測」
〈植物部門〉 山口　　真「山形市周辺粘菌標本の採取と特別展『森の妖精
－不思議な生き物、粘菌－』展示における標本作製の工夫」
〈考古部門〉 原田　俊彦「山形県立博物館所蔵の山形城跡出土瓦について」
〈歴史部門〉 岩崎　　靖「山形県からの移民」
佐藤　佳美「『寶幢寺および佐伯菅雄資料』より『山形県布達』について」
〈民俗部門〉 須田真由美「『永壽講』関連文書の調査」
〈教育部門〉 青木　章二「山形県における青い目の人形の受入れをめぐる状況について
－個人所蔵に係る人形の調査から－」

平成30年度	研究報告第37号	発行年月日	平成31（2019）年３月29日

〈地学部門〉 石黒　宏治「カイギュウ化石の３Ｄプリンターによるレプリカ製作」
〈植物部門〉 山口　　真「紅花色素抽出における化学的アプローチによる簡易的抽出方法の検討」
〈動物部門〉 羽角　正人・本間　正明「『山形県立博物館動物資料データベースとS-Net/GBIF』への登録」
〈考古部門〉 原田　俊彦「館長・学芸員講座「鎌倉の浜辺を掘ってみたら……を振り返る」
〈歴史部門〉 岩崎　　靖「『明治150年』記念特別展『転換点』をふりかえって」
佐藤　佳美「資料紹介『庄内家絵画資料』について」
〈教育部門〉 青木　章二「明治初期の教員養成事業と山形県師範学校の建設」
〈教育普及〉 須田真由美「博物館まつりの実施及び今後の展望について」

令和元年度	研究報告第38号	発行年月日	令和２（2020）年３月31日

〈植物部門〉 山口　　真「紅花研究における黒田チカ資料と山形県研究者佐藤チセとの関連について」
〈動物部門〉 羽角　正人「山形県立博物館収蔵資料・動物データベースの更新作業」
〈考古部門〉 原田　俊彦「特別展『やまがたの城』を振り返る」
〈歴史部門〉 岩崎　　靖「山形戊辰戦争における庄内藩の動きについて」
佐藤　佳美「『寶幢寺及び佐伯菅雄資料』より山形県布達文書番号順目録１」
〈教育部門〉 青木　章二「明治20年代後半の山形県における単級教授の実際」

令和２年度	研究報告第39号	発行年月日	令和３（2021）年３月31日

〈地学部門〉 小林　　透「めずらしい雲（館長・学芸員講座から）」
〈植物部門〉 山口　　真「山形県立博物館の建設物としての特徴と設計者・山下寿郎」
〈動物部門〉 本間　正明「山形県庄内平野にアネハヅルが飛来していたー実物資料の存在から
明らかになった初飛来の記録」「北日本初のヒゲワシ剥製標本の発見」
羽角　正人「山形県立博物館動物資料データベース更新のためのS-Net登録データの修正」
〈考古部門〉 押切　智紀「村山市川口遺跡の動物形土製品」
〈歴史部門〉 岩崎　　靖「山形城主最上家親について」
佐藤　佳美「『寶幢寺及び佐伯菅雄資料』より山形県布達文書番号順目録２」
〈民俗部門〉 須田真由美「分光分析及び三次元蛍光分光光度計による紅染め資料の
非破壊色素成分分析（共同研究）の中間報告」
浅黄　喜悦「【資料紹介】租借地大連における生活と引き上げの実相
～故柴田謙吾氏の足跡より～」
〈教育部門〉 青木　章二「山形県内で出版された明治期の教科書
－当館教科書コレクション及び他機関の所蔵状況等について」

山形県立博物館50年のあゆみ

令和４年３月25日

編集・発行　山　形　県　立　博　物　館
〒990－0826　山形市霞城町１－8
ＴＥＬ　(023) ６４５－１１１１
ＦＡＸ　(023) ６４５－１１１２
印　　刷　中　央　印　刷　株　式　会　社
ＴＥＬ　(023) ６３１－５５３３